

平成30（2018）年度  
自己点検・評価報告書  
（抜 粋）

鎌倉女子大学 中等部・高等部

## 第1章 中等部 自己点検・評価

## 1. 教育目標

1-①	<ul style="list-style-type: none"> <li>・設置者の示す明確な教育方針（建学の精神）等に基づいて教育目標を設定し、教育活動その他の学校運営を行っているか。</li> </ul>
取組目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・平成30（2018）年度を始めるに当たり、3月末の校内研修会で平成29（2017）年度策定した「教育の3本柱」の中に、これまでの学校改革の取り組みを再構築して全校の教職員に示すとともに、その内容の充実を図った。3本柱の内容は次のとおりである。</li> <li>・「建学の精神にもとづき豊かな人間性を育む」とする。</li> <li>・「自立して活躍できる確かな学力を育む」とする。</li> <li>・「国際社会で活躍できる語学力・表現力を育む」とする。</li> </ul>
取組内容 と成果	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「建学の精神にもとづき豊かな人間性を育む」では、新入生を対象とした外部講師による「コミュニケーション講座」「エンカウンター講座」が2年目を迎え全校の3分の2の生徒が受講したことになった。講座の内容は、建学の精神が目指すものとの共通項が多く、生徒にとっては有意義な機会となっている。さらに本物に触れる活動として校外学習「理科の日」における1年次の「観音崎」、2年次の「小網代の森」、3年次の「生田緑地」、また、芸術鑑賞における1年次「バレエ」、2年次「オーケストラ」、3年次「落語」という3学年分のプログラムの定着を図った。中等部においては、今後もこうした体験的な活動を通して感性豊かな生徒の育成を重視していく必要がある。</li> <li>・「自立して活躍できる確かな学力を育む」では、基礎学力の定着に向けて、日々の授業はもとより朝、帰りのショートホームルームの活用、放課後の学習支援センターを運営する予備校との連携強化を通して、取り組みを深めることができた。家庭学習の定着については、朝のショートホームルームを活用し、1週間の学習を振り返る「週プラン」の取り組みを始めたことで、生徒の意識も高まってきた。</li> <li>・「国際社会で活躍できる語学力・表現力を育む」では、新しい英語教育プログラム「鎌倉FITS」の多岐にわたるプログラムを導入した。また、平成30（2018）年度から1年生に、英語学習指導アドバイザー（金谷憲東京学芸大学名誉教授）の指導のもとで開発を進めてきた、新たな指導法による授業を導入した。</li> </ul>
今後の課題 と改善策	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「豊かな人間性」については、時代に即したものとなるよう、絶えず振り返りをしていかなければ、旧態依然としたものから抜け出すことが難しい。教職員のさらなる意識改革を進める。</li> <li>・「確かな学力」と「語学力」の育成については、取り組みの成果を進路実績等をとおして示していく必要があり、募集力の強化に直接結びつく取り組みとして学校全体で取り組む。</li> </ul>

1-②	<p>・学校の状況を踏まえ重点化された中・短期の目標が定められているか。</p>
取組目標	<p>年度当初に部長が全職員に示す「取組方針」として以下の目標を設定する。</p> <p>①学力向上、進学実績向上の取り組み</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・特進コース一本化の初年度であり、細かく日頃の学力状況を把握し、保護者とも十分に連携を密にしながら、生徒の学力をしっかりと引き上げる。</li> <li>・平成30（2018）年度から導入する学習コンテンツ「Classi」を活用し、生徒のモチベーションを引き出し、自学自習の力を付けるとともに、教員も「生徒カルテ」などの機能を利用し、授業内容や指導方法の質的向上に取り組む。</li> </ul> <p>②教員研修及び業務改善の推進</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・研修及び業務改善（働き方改革を含む）を推進する特設チームを校務分掌組織に位置付け、必要性や優先順位などを勘案し、講師の選定も含めて校内研修の質的向上に取り組む。</li> </ul> <p>③英語教育の充実</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・英語学習指導アドバイザー（金谷東京学芸大学名誉教授）の招聘による英語科教員の研修及び授業プログラム開発の成果を生かし、鎌倉FITSプログラムに基づく新たな英語教育を展開する。</li> <li>・2月に姉妹校提携を行ったブリジディーン・カレッジ（オーストラリア）とのさらなる人的交流など、多彩なプログラムによる本校独自の魅力を構築する。</li> </ul>
取組内容 と成果	<ul style="list-style-type: none"> <li>・① 学力向上、進学実績向上の取り組みについては、平成30（2018）年度から導入した学習コンテンツ「Classi」を活用し、生徒のモチベーションを引き出すとともに、教員にもこれらの機能を活用し授業内容や指導方法の質的向上に取り組む姿勢が見られるようになった。</li> <li>・学習コンテンツ「Classi」の活用については、進んで取り組む学年や教員の姿が見られたが、まだ、活用のチャンスやスキルが十分ではない教員も見受けられた。</li> <li>・② 教員研修の充実による指導力向上のために、生徒の「コミュニケーション講座」講師から2回にわたり「コーチング研修」を開催した。また、業務改善の一環として各自に支給されたタブレットを用いて職員会議をペーパーレス化した。</li> <li>・③ 英語教育の充実については、姉妹校ブリジディーン・カレッジ（オーストラリア）におけるターム留学（夏期）とニュージーランドにおけるターム留学（冬期）の新制度による本校独自のプログラムに生徒が参加した。またブリジディーン・カレッジとの相互交流の一環として卒業生を受け入れる取り組みを始めることができた。</li> </ul>
今後の課題 と改善策	<ul style="list-style-type: none"> <li>・平成30（2018）年度から導入した学習コンテンツ「Classi」の活用については、今後、実践事例などを教科会等で共有し、授業の充実を図る。また、「生徒カルテ」の機能については、個人面談などでの活用を促していく。</li> <li>・英語学習指導アドバイザーのもとで得た、指導法や授業プログラム開発方法についての知識や経験を踏まえ、より発展的な英語教育を展開していく。</li> <li>・今後、海外の語学研修のプログラム充実を図るためには、英語科教員だけでなく、広く本校教員の中に留学に関する知識を持った担当教員を増やして制度の継続や充実を進める。</li> </ul>

## 2. 教育課程

2-①	<ul style="list-style-type: none"> <li>学校の教育目標を踏まえて教育課程が編成・実施され、その考え方について教職員間で共有されているか。</li> </ul>
取組目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>自立して活躍できる確かな学力を育むための取り組みを強化する。</li> <li>生徒の学力向上に向け、より内容の充実した授業改善に取り組む。</li> <li>基礎学力の定着を目指す。</li> </ul>
取組内容 と成果	<ul style="list-style-type: none"> <li>すべての生徒が1週間の学習計画を立て、実際に行った学習内容を記録する「週プラン」を活用したことで、自立した学習を促すことができた。</li> <li>生徒が自立して活躍できる確かな学力を育むため、教員各自が外部研修に参加し、スキルアップを目指した。</li> <li>家庭学習の習慣化により、基礎学力の定着を図った。生徒の学力に多少のばらつきが見られたが、学習習慣は定着しつつある。</li> <li>生徒の学習状況を把握し、定期的に生徒と面談をするなど、学習指導を充実させてきた。</li> </ul>
今後の課題 と改善策	<ul style="list-style-type: none"> <li>学力向上については、まだ数値として明確には表れてきていないが、基礎学力は定着しつつあるので、今後も継続して、生徒個々の学力状況から適当な教材を見極めたり、指導方法を工夫したりし、基礎学力の定着を図り、更なる学力向上を目指す。</li> <li>教員の指導技術の向上に向けた研修参加を充実させるとともに、授業への還元を目指す。</li> <li>家庭学習の習慣化を更に徹底させるように、生徒に粘り強く指導を続けていく。</li> </ul>

2-②	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教育課程の実施に必要な、各教科・道徳・総合的な学習の時間・特別活動の年間指導計画や週案などが適切に作成されているか。</li> </ul>
取組目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・授業進度や内容を「シラバス」として作成する。</li> <li>・各担当は、すべての授業の「年間学習指導計画表」を作成する。</li> <li>・道徳、総合的な学習の時間、特別活動については、年度当初に学年ごとの年間計画を立て、活動の方針を決定する。</li> </ul>
取組内容 と成果	<ul style="list-style-type: none"> <li>・シラバスは、教科で検討・作成し、その計画に従って授業を実践した。</li> <li>・年間学習指導計画表は、各教員が担当する授業それぞれについてすべて作成し、計画的に授業が行われた。</li> <li>・年間学習指導計画表は、学期ごとに「自己評価」及び「今後の課題と対策」を記入し、報告することで、授業改善に努めた。</li> <li>・ロングホームルームは、各学年の行事や進路指導を中心に、総合的な学習の時間は、起業家教育の取り組みを中心に、計画・実施することができた。</li> <li>・道徳教育では、入学座禅、立居振舞講座などを年間計画に盛り込み、適宜実施することができた。</li> </ul>
今後の課題 と改善策	<ul style="list-style-type: none"> <li>・年間学習指導計画どおりに授業を進められるよう、シラバスの見直しや学習指導のあり方について検討する。</li> <li>・ロングホームルームでは、行事の準備だけでなく、進路研究などの機会をより充実させる。</li> <li>・総合的な学習の時間では、生徒の主体性を第一に、学齢に応じたパソコンや発表などのスキルを身に付け、起業家教育の活動をより充実発展させていく。</li> </ul>

2-③	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 必要な教科等の指導体制が整備され、授業時数の配当が適切に行われているか。</li> </ul>
取組目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 国語、数学、英語の授業時間数を文部科学省の標準時間より充実させて、基礎学力の向上を図る。</li> <li>・ 管理職及びスーパーバイザー（経験豊富なベテラン教員）による授業参観や、教員同士の相互参観を行う。</li> </ul>
取組内容 と成果	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 授業確保のため、①すべての入試日に授業を行った。②体育祭予行日は午前中授業とし、体育祭準備は放課後に行った。③2学期始業式に模擬試験を行い、授業日を増やした。④3学期始業式に授業を行った。⑤みどり祭準備は2日間で行った。⑥健康診断日の午後に授業を行った。⑦1学期の終業式の翌日から5日間、全員参加の夏期集中授業を設定した。⑧夏期講習会、冬期講習会を行った。⑨三者面談を中間試験後から期末試験後の行事日の午後に移し、期末試験前の授業を確保した。</li> <li>・ 体験活動などの校外学習や学校行事も重視しているため、授業時間を十分取れるように、文部科学省の標準時間と比較して週当たりで、国語で約1.6倍、数学で約1.4倍、英語で約1.5倍の授業時間数を設定している。本校独自に設定した授業時間数の確保には至っていない科目もあるが、文部科学省の標準時間よりは上回っている。定期試験の4週間と祝日や行事による実授業数減分を補うため、37週で授業計画をして授業数確保に努めた。</li> <li>・ 公開授業週間を設け、教員同士の相互参観を促進した。</li> <li>・ 適宜、行事と授業の関連付けを考慮した。</li> </ul>
今後の課題 と改善策	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 今後、授業時間数の確保のため、行事の見直しを検討する。</li> <li>・ 短縮授業や半日授業などで、可能な限り行事日も授業を行う。</li> <li>・ 管理職及びスーパーバイザーによる授業参観や相互参観によって得られた知見を、今後の指導に反映する。</li> </ul>

2-④	<ul style="list-style-type: none"> <li>生徒の学習について観点別学習状況の評価や評定などの基準が設定されているか。</li> </ul>
取組目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>学年やコースなど生徒個々の学習状況に応じ、生徒の学習を多面的に評価するために、定期試験の点数以外に、日頃の学習の取り組み等を対象に加えて評価する。</li> <li>客観性と公平性を十分に担保した上で、進学コースと特進コースでは、試験問題を原則として分け、さらに目標とする平均点を60±5点と定め、問題の適正化を図る。</li> </ul>
取組内容 と成果	<ul style="list-style-type: none"> <li>国語、社会、数学、理科、英語などの座学を中心とする科目では、定期試験の価値を高めていくために、高等部に準じた100点法に基づく評価法にした。ただし、定期試験以外に、グループワーク、実験、実習、実技試験及び、小テスト、レポート等の提出物も評価に加え、学年末には観点別評価も記録した。</li> <li>保護者には、各学期の10段階評価と学年の5段階評定を報告し、観点別評価に見られる「AAAB」で5が付くことがある反面、「AAAA」で4が付くことあるなどのわかりにくさを解消した。</li> <li>各学期の10段階評価及び学年の5段階評定は、教務部で定めた点数の区分表に当てはめて算出し、どの科目においても、同じ100点法の点数であれば、同じ評価及び評定が付くようにした。しかし、教科によっては定期試験の素点が低く、100点法算出の際に平均点の調整が行われた。</li> <li>2、3年生では、定期試験の問題の一部を進学コースと特進コースとに分け出題し、学力向上に寄与するとともに、評価の公平性を担保するため、難易度の高い出題がされる特進コースでは、共通問題の得点率の差を用いて加点措置を行った。</li> </ul>
今後の課題 と改善策	<ul style="list-style-type: none"> <li>定期試験の平均点をどの教科も60±5点に近づけていくために、日頃から生徒の理解度を図り、問題作成に生かしていく。</li> <li>観点別評価が4観点から3観点になることや特別の教科道德の記述による評価など文部科学省による指導要録の様式変更に伴い、教務主任を中心に理解を深め、適切に対応していく。</li> </ul>

## 3. 学習指導

3-①	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学習指導要領や設置者が定める基準（学則）にのっとり、学校全体として、生徒の発達段階や学力、能力に即した指導が行われているか。</li> </ul>
取組目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・中・高等部6年間を見越した各教科の学習指導計画の構築を図り、本校の実態に即した教科教育を行う。</li> </ul>
取組内容 と成果	<ul style="list-style-type: none"> <li>・中等部入学前の新入生保護者を対象に、ガイダンスを行うことで、入学前に知っておいてほしい学習のことや思春期の子どもとの関わり方について各家庭の理解や協力を得ることができた。</li> <li>・中等部入学試験後も学習の目標を失うことなく学習意欲や学習姿勢を維持するために、新入生試験や入学前課題に取り組むことで、基礎学力の定着だけでなく苦手分野の克服を図ることができた。</li> <li>・授業では、必要に応じて過年度の学習内容を含めたり、教科書外の内容に言及したりと基礎学力の定着と学力向上を図った。</li> <li>・数学の授業では、基礎力習得クラス、基礎力定着クラス、応用力育成クラスの3クラスに分け、生徒自身が主体的にクラスを選択することで、授業への参加意識を高め、生徒一人ひとりのレベルにあった授業が展開できた。一方、生徒自身がクラスを選択することで、各クラスの数に偏りが出たり、クラス内の生徒間で学力の伸長度に差が出てしまうこともあった。</li> </ul>
今後の課題 と改善策	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学習指導要領の改訂に適切に対応できるように、現在の学習指導計画を見直し、シラバスに反映させていく。</li> <li>・数学の授業では、選択によって各クラスの数に偏りが出たり、クラス内の生徒の学力の伸長度に差が出てしまうことへの改善策を検討していく。</li> </ul>



3-②	<ul style="list-style-type: none"> <li>生徒の学力・体力の状況を把握し、それを踏まえた取組が行われ、PDCAサイクルに基づいて適切に改善されているか。</li> </ul>
取組目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>生徒が自ら学び、考え、行動できるようになるために、「書く・記録する」、「時間を意識する」、「考える」の3つの基本動作を習慣化し、自己管理能力を身に付ける。</li> <li>各種検定試験における目標級の取得を目指す。</li> </ul>
取組内容 と成果	<ul style="list-style-type: none"> <li>「Classi」の「学習記録」や「フォーサイト手帳」を活用することで、主体的な学習姿勢を身に付けるだけでなく、家庭学習の習慣化を図った。</li> <li>二者面談や三者面談では、「Classi」の「生徒カルテ」を活用することで生徒一人ひとりに応じたきめ細かい指導を行うことができた。</li> <li>「Classi」のポートフォリオ機能を利用し、学校生活のなかで得た学びを記録し、振り返ることで主体的に学ぶ力を育むことができた。</li> <li>長期休暇中の提出物状況調査を行い、教員間にて情報共有を図ることで、学校全体で未提出物を減らす取り組みを行った。</li> <li>大学入試改革を考慮し、英語検定の受検を奨励したことで、前年度と比較して多くの生徒が受検した。また、漢字検定や数学検定では、受検者に過去問を配布するなど各学年の目標級の達成や上位級の合格者を増やすための工夫をした。</li> </ul>
今後の課題 と改善策	<ul style="list-style-type: none"> <li>「Classi」の学習記録については、授業や行事、委員会等多岐にわたって活用の幅を広げていくことで、多くの生徒が、「Classi」にログインする習慣を身に付け、「Classi」の利用価値を高めていく。</li> <li>各検定では、学年の目標級を生徒全員に共有させ、目標級達成や上位級への挑戦の機運を高める声かけを行う。</li> </ul>

3-③	<ul style="list-style-type: none"> <li>・発問、板書、指名など、各教員の指導性が各教科の授業において適切に発揮されているか。</li> </ul>
取組目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・従来型の授業スタイルに固執することなく、生徒主体型授業を導入するなど、より確かな学力が身に付くよう生徒の指導にあたる。</li> <li>・講義中心の授業から、生徒主体の授業への転換を図る。</li> <li>・知識習得中心の授業から、考える授業への転換を図る。</li> </ul>
取組内容 と成果	<ul style="list-style-type: none"> <li>・机の配列の工夫や図書室や情報処理室、マルチメディアラウンジの活用など、授業内容の目的に応じて柔軟な取り組みを行い、生徒の学習への関わりを強化することができた。</li> <li>・電子黒板や教員及び生徒用タブレットを活用することで、知識習得中心の授業からの脱却を図り、生徒一人ひとりの学習意欲の向上に努めることができた。</li> <li>・従来の板書による授業やプリント学習に加え、タブレットや電子黒板等のICT機器を活用するなど、わかりやすい授業を目指した。</li> </ul>
今後の課題 と改善策	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学習教材の精選と活用を心がけ、授業の組み立てについて工夫・改善していくことで、生徒の学習意欲の向上や学力の向上に努める。</li> <li>・学習指導要領改訂に伴い、教員の情報活用能力の引き上げと様々な教育活動の場でICT機器を積極的に活用していく。</li> </ul>

3-④	<ul style="list-style-type: none"> <li>・視聴覚教材や教育機器、コンピュータや情報通信ネットワークを効果的に活用した授業が行われているか。</li> </ul>
取組目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・動画コンテンツを利用して、生徒の学び直しや授業の予習・復習、各種検定の対策に利用する。</li> <li>・電子黒板やタブレット等のICT機器を、各教員が授業で活用できるようになる。</li> <li>・電子黒板やタブレット等の活用事例とその効果を教科で共有し、効果的な活用を推進する。</li> </ul>
取組内容 と成果	<ul style="list-style-type: none"> <li>・過年度の学び直しや授業の予習・復習としてWEB学習システム「デキタス」、英語検定試験の対策としてeラーニング教材「英検キャット」を利用することができた。</li> <li>・マルチメディアラウンジのパソコンを更新するだけでなく、プリンターを設置したことで、授業内で効果的に活用することができた。</li> <li>・教員用タブレットの導入により、電子黒板と併用して利用する場面が多くなった。動画やインターネットを活用した授業が日常的に行われるようになり、ICT機器を使った授業が浸透した。</li> </ul>
今後の課題 と改善策	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教科内でタブレットの実践事例を共有・蓄積していくことで、教職員の活用率を高めていく。</li> <li>・情報機器は、「使用すること」そのものが目的ではなく、使用することにより「授業効果を高めること」が目的であるという視点で、もう一度、使用方法を見直す。</li> </ul>

3-⑤	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学校図書館の計画的利用や、読書活動の推進に取り組んでいるか。</li> </ul>
取組目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・週1時間国語の時間を「読書の時間」とし、図書室で国語科教諭が授業を行う。（3年次特進コースは、「卒論の時間」にチームティーチングで参加）</li> <li>・「読書の時間」を利用して、新1年生に図書室ガイダンスを行う。</li> <li>・「読書の時間」以外の授業にも図書室利用や教室への本の貸出などを行う。</li> <li>・授業利用以外の本、主に読み物を多く選書する。</li> </ul>
取組内容 と成果	<ul style="list-style-type: none"> <li>・1学期については、1年生は図書室ガイダンス、POP作りと読書感想文、2年生は本の帯作り、3年生はLibrary NAVI（図書室本紹介）作りを行った。</li> <li>・2学期については、1年生は生徒のグループ同士で本の読み聞かせと読書感想文、2年生は詩の朗読、要旨をとらえる、「まわし読み新聞」作り、読書感想文に取り組んだ。3年生進学コースは詩の朗読・鑑賞・発表、卒業レポート作成を行った。</li> <li>・3学期については、1年生はレポート作成・発表・鑑賞、2年生進学コースはおすすめ本の3分間スピーチ、特進コースはおすすめ本の5分間スピーチを行った。3年生進学コースは2学期のレポートの続きと、図書室の本を紹介する「おすすめ本ブックカタログ」を作成した。</li> <li>・3年生特進コースは、テーマ発表・中間発表・完成発表など要所でスピーチ発表を交えながら、1年間かけて卒論を書いた。</li> <li>・1学期の作品は、みどり祭で展示した。</li> <li>・担当する教諭や生徒の様子により、活動内容は違ってくるが、新しい試みに挑戦したり、比較的国語の通常授業と連動した内容になったように思われる。</li> <li>・授業利用以外の読み物については、生徒・教員の希望も取り入れつつ選書できた。</li> <li>・卒業学年から年度末に「後輩に贈る本」と展示用棚を卒業記念品として寄贈され、受入・配架・展示した。</li> </ul>
今後の課題 と改善策	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「読書の時間」計画については、国語科が作成しているため、各学年の様子なども話し合い、引き続き柔軟な授業ができるよう準備する。</li> <li>・生徒によって、読書力に差があるため、広い範囲の本を集めていく。</li> <li>・生徒全体でライトノベルが中心の読書になっているため、文学史学習などで視野を広げ、ライトノベル以外のジャンルの本にも目を向けさせる。</li> <li>・授業で調べ学習をした学年には、引き続き他の教科でも調べ学習を取り入れてもらうよう担当教諭に働きかける。</li> </ul>

3-⑥	<ul style="list-style-type: none"> <li>・体験的な学習や問題解決的な学習、生徒の興味・関心を生かした自主的・自発的な学習が適切に行われているか。</li> </ul>
取組目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・様々な体験学習を通して豊かな人間性を育む。</li> <li>・各教科の授業において、従来のような教員の一方的な講義形式の「教わる学習」から「自ら学ぶ学習」への転換を図る。</li> <li>・各教科の授業では、グループごとに課題に取り組みせたり、討論の場を設け発表させるなどして、生徒が抱いた興味・関心がその後の自主的な学習につながっていくようにする。</li> </ul>
取組内容 と成果	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「宿泊オリエンテーション」や「エンカウンター講座」、「コミュニケーション講座」を通して良好な人間関係を築き、自立心と他者を思いやる心を育むことができた。</li> <li>・理科の日や芸術鑑賞教室では、各学齢に応じた作品に触れることを通して、本物の美しさに感動する心を養うことができた。</li> <li>・精神修養会、立居振舞講座では、自らを見つめ律する道德観と女性らしい所作を身に付けることができた。</li> <li>・イングリッシュキャンプや海外語学研修では、異文化に触れることを通して、基礎的なコミュニケーション能力と異文化理解の素地の育成、日本人としてのアイデンティティの形成、主体的に英語で表現する姿勢を育むことができた。</li> <li>・各教科の授業において、グループでの共同学習、討論、発表等をできるだけ多く取り入れるようにし、生徒自身の気づきが学びにつながるような授業を実践した。また、グループ討議などでは、慣れない生徒もいるため配慮することも必要であったが、回数を重ねるにつれ、生徒の学びの姿勢が能動的になったと見受けられる部分はあった。しかし、教科書の内容を終わらせることを考えると、時間が足りない現状が見られた。</li> </ul>
今後の課題 と改善策	<ul style="list-style-type: none"> <li>・今後も生徒自身の気づきによる学びといった基本的な考え方のもと、1つの授業時間のなかで講義、質問、グループ討議といった様々な授業形態を複合させるなどの工夫を行っていく。</li> </ul>

3-⑦	・学校行事、体験活動などが、適切な管理体制の下に実施されているか。
取組目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学校行事の体験や運営を通して、思考力や実践力を身に付け、感動や達成感が味わえるようにはたらきかける。</li> <li>・生徒の安全を第一に考え、起こり得る危険を想定し、対処できるよう準備することを整理しておく。</li> </ul>
取組内容 と成果	<ul style="list-style-type: none"> <li>・みどり祭や卒業生を送る会などの学内行事では、各実行委員が担当教員と連携を図り、リーダーシップをとることで、生徒主体の有志企画が年々充実してきた。自主性や積極性を発揮し、得意分野を様々な形で表現する生徒が増えた。</li> <li>・宿泊等の学外行事では、自然災害時の対応、最寄りの医療機関等を事前に保護者に示し、健康状態の調査を行うなどして、安全を第一に実施することができた。また、行程については、数か月前から業者と打ち合わせを重ね、時間的に余裕を持った見学や体験活動ができるよう計画した。</li> </ul>
今後の課題 と改善策	<ul style="list-style-type: none"> <li>・本校の良さを残しながらも、より生徒主体での行事運営ができるよう、新しいことにも積極的に挑戦していく。</li> <li>・「生徒主体型学習」の取り組みのひとつとして、学年を越えて行う起業教育プログラム「Kamakura Beyond Project」については、今後も事前研究、準備に時間をかけ、魅力あるカンパニーづくりができるよう準備を進める。</li> <li>・学外行事の実施にあたっては、今後も生徒の安全に注意を払い、様々な側面から考え、細かく計画していく。</li> </ul>

3-⑧	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒会活動などが、適切な管理体制の下に実施されているか。</li> </ul>
取組目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学級委員会では、学校行事の一部を委員会で企画・運営を行う。</li> <li>・保健体育委員会では、体育祭を含む保健体育関係の活動の運営・補佐を行う。</li> <li>・文化委員会では、「学校新聞」の発行を行う。</li> <li>・美化委員会では、校内及び周辺の美化活動を統括する。</li> <li>・ボランティア委員会では、各種募金活動やボランティア活動を統括する。</li> <li>・みどり祭実行委員会では、みどり祭の企画・運営を行う。</li> <li>・合唱コンクール実行委員会では、合唱コンクールの企画・運営を行う。</li> <li>・卒業生を送る会実行委員会では、卒業生を送る会の企画・運営を行う。</li> </ul>
取組内容 と成果	<ul style="list-style-type: none"> <li>・常任委員会（学級委員会、保健体育委員会、文化委員会、美化委員会、ボランティア委員会）の前後期制を継続させ、活動期間を長く設定し、生徒が主体的に活動しやすいようにした。</li> <li>・学級委員会では、4月19日に新入生歓迎会を行い、みどり祭でも実行委員とともに企画・運営を行った。また生徒の発案で、登校時に校門での挨拶活動を始めた。</li> <li>・保健体育委員会では、4月18日の健康診断の準備、片付けを行い、5月16日に体育祭を実施した。また、次年度に向けて体育祭の企画を練った。</li> <li>・文化委員会では、年度末に「学校新聞」を発行した。</li> <li>・美化委員会では、各教室に花を飾るなど、校内の美化に努めた。また、校内外の花壇の整備を行った。</li> <li>・ボランティア委員会では、青少年健全育成推進街頭キャンペーンへの参加、赤い羽根共同募金、緑の募金の校内募金運動への参加、ダルニー奨学金、ecoプロジェクト（使い捨てコンタクトレンズ空ケース回収運動）等、様々な活動に参加した。</li> <li>・各実行委員会では、9月15、16日みどり祭、10月3日合唱コンクール、2月21日卒業生を送る会を実施し、成功させた。</li> <li>・朝や昼休みを使ったランチミーティング形式にすることで活動を継続している。</li> </ul>
今後の課題 と改善策	<ul style="list-style-type: none"> <li>・委員会の運営をさらに効率よく行うため、委員会の連絡事項は、「Classi」等を活用することを検討する。</li> <li>・委員会全体について活動内容を見直し、存廃、新設も含めた再編成を検討する。</li> </ul>

3-⑨	<ul style="list-style-type: none"> <li>・部活動など教育課程外の活動が、適切な管理体制の下に積極的に実施されているか。</li> <li>・部活動が、教職員全体の協力体制の下で実施されているか。</li> </ul>
取組目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・事故防止、事故発生時、事故後についての対策を事前にまとめることにより、まずは事故を未然に防ぐ工夫をし、万が一事故が発生した場合においても速やかに安全対策や応急手当ができる準備を整える。</li> <li>・安全に楽しく活動ができるように、活動時間、活動場所、活動内容を定める。</li> </ul>
取組内容 と成果	<ul style="list-style-type: none"> <li>・校友会各部で作成している「校友会・事故防止のための安全対策」に基づき、安全や事故防止に配慮して活動を行った。</li> <li>・部活動ごとに休養日を設け、学習面との両立を図りながら安全面にも十分に留意して活動を行った。</li> <li>・活動中はできる限り顧問が監督できるよう、特に運動部では、顧問を2名以上配置している。職員会議など職員不在時は、活動内容を工夫し安全性の高いものに調整するか、活動自体を自粛している。</li> <li>・可能な限り活動中に顧問が監督できるようにしているが、会議や校務が重なり、顧問不在の場面も散見された。</li> </ul>
今後の課題 と改善策	<ul style="list-style-type: none"> <li>・施設や備品の不備、破損がないか常にチェックし、二次災害防止の観点も含めて速やかに修理や交換を行う。</li> <li>・顧問不在の場合は、同じ活動場所を使用する別の校友会顧問と協力して対処・連絡が取れるように工夫しているが、さらに、特別講習、学習支援センターによる補習、委員会活動など放課後活動を整理し、担当顧問が直接安全管理できる体制を整備していく。</li> <li>・中・高等部の組織として部活動を教育活動の一環と捉え、学校全体で生徒の実践力・思考力・共生力を育むための協力体制を整えていく。</li> </ul>



3-⑩	<ul style="list-style-type: none"> <li>・個別指導や習熟度に応じた指導、補充的な学習や発展的な学習など、個に応じた指導が適切に行われているか。</li> </ul>
取組目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学習支援センターでは、個々の学力やニーズに合わせた各種コンテンツを実施することで、基礎学力の定着から応用力の育成までを目指す。</li> <li>・各種講習を実施することで、発展的な学習及び補充的な学習の役割を果たす。</li> </ul>
取組内容 と成果	<ul style="list-style-type: none"> <li>・予備校講師による講義のあと、講義内容による演習を行い、指導員が演習の質問や理解の弱い生徒へ対応することで、自身の課題発見やその克服に取り組むことができた。また、「映像授業」や「ロ型演習」等の各プログラムにおいても、組織立てた「学び直し」を同時に進めることができた。</li> <li>・特進コースを対象とした特進講習や特進夏期講習を実施することができた。また、講習では、授業内容の理解や定着に主眼をおきながら、基礎から発展までの幅広い問題にあたることができた。</li> </ul>
今後の課題 と改善策	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学習支援センターについては、学習効果や生徒満足度を高めるため、運営を行っている提携予備校とも協議したうえで、内容を充実させていく。</li> </ul>

3-⑪	<ul style="list-style-type: none"> <li>・チームティーチング指導などにおいて、教員間で適切な役割分担がなされているか。</li> </ul>
取組目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・理科の実験・観察においては、安全を第一に教科担当の他に実験助手がつき、チームティーチングで実験・観察指導にあたる。</li> <li>・英会話の授業では、各学年ともネイティブの教員に授業担当者がつき、授業の進度や生徒の理解度に合わせて、授業担当者がフォローに入るようにする。</li> </ul>
取組内容 と成果	<ul style="list-style-type: none"> <li>・理科の実験・観察においては、各班や個々の実験状況に応じて、実験助手がサポートすることにより、生徒が方法や手順を理解しながら時間内に実験を進めることができた。</li> <li>・英会話では、チームティーチングの形態での授業を以前から行っており、授業の進め方などは、英語科のなかで確立されつつあり、学習効果が上がっている。</li> </ul>

3-⑫	<ul style="list-style-type: none"> <li>・併設校3部の連携・協力のための取組がなされているか。</li> <li>・幼稚部との連携に関する取組がなされているか。</li> <li>・小中連携など学校間の円滑な接続を図るための取組が行われているか。</li> <li>・中高連携など学校間の円滑な接続を図るための取組が行われているか。</li> </ul>
取組目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・幼稚部、初等部、中・高等部においては、行事や授業等の機会を通して可能な範囲で連携しつつ教育活動を推進する。</li> <li>・幼稚部と中等部では、みどり祭での補助をはじめ、中等部2年次の家庭科の授業においても連携を図る。</li> <li>・初等部と中等部では、入試広報関係を強化し、初等部に中等部の教育活動をより詳しく知ってもらうための企画を実施する他、授業においても連携を図る。</li> <li>・初等部、中等部では、中等部に進学する児童を対象に算数講座を実施することで、入学後の学習に躓くことのないよう基礎学力の定着を図る。</li> <li>・中等部、高等部では、それぞれの発達段階を踏まえ、教科において中等部での学びが高等部につながるように配慮するとともに、校友会活動や各行事においても学年ごとの役割をもたせた上で上級学年につなげる。</li> <li>・中等部では、高等部進学者を対象にガイダンスを実施することで、学習意識を高め、早い段階で高等部に向けた学習準備に取り組みさせる。</li> </ul>
取組内容 と成果	<ul style="list-style-type: none"> <li>・併設校3部では、可能な範囲で連携をとることができた。</li> <li>・幼稚部との連携においては、中等部2年生を対象に、家庭科の保育内容を実践的に学ぶための園児とのふれあい体験を幼稚部の協力を得て実施した。</li> <li>・初等部との連携においては、中等部入試広報担当者による教員向けの説明会及び保護者向けの説明会を実施した他、中等部1年生担当教員と初等部6年生担当教員との間で中等部に進学する生徒の申し送りの機会を設けた。</li> <li>・中高連携では、中等部において、学習習慣の確立と基礎学力の定着を目指し、各学齢に応じた学習の取り組みを行うことにより、高等部の学習にスムーズに移行することができた。また、総合学習「Kamakura Beyond Project」では、中等部2年生から高等部2年生までを縦割りにした起業家教育のなかで、高等部2年生をトップに組織を編制し、学齢（発達段階）に応じた役割分担で活動を行った。その結果、下級生は上級生の活動を間近に見ることで、組織の運営を理解し成長することができた。</li> </ul>
今後の課題 と改善策	<ul style="list-style-type: none"> <li>・初等部との連携を更に深めるため、みどり祭に来校された初等部の保護者に対して、初等部と中・高等部の接続教育について、アピールできる場を設けるように検討していく。</li> </ul>

3-⑬	<ul style="list-style-type: none"> <li>・大学（鎌倉女子大学・鎌倉女子大学大学院・鎌倉女子大学短期大学部）との連携に関する取組がなされているか。</li> </ul>
取組目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教育実習、教職実践演習フィールドワークにおいて大学との連携を図る。</li> <li>・みどり祭において大学の学友会と中等部の校友会との連携を図る。</li> </ul>
取組内容 と成果	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教育実習、教職実践演習フィールドワークにおいては、予定どおり連携することができた。</li> <li>・大学のみどり祭においては、マーチングバンド部とフェアリーコンサート部が演奏・演技を披露した他、中・高等部のみどり祭では、フラダンス等幾つかの学友会が演奏・演技を披露し、会場を盛り上げた。</li> </ul>
今後の課題 と改善策	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教育実習における学生の評価については、大学側と情報を共有し、報告をする過程を通して、より連携を図っていく。</li> <li>・みどり祭での交流については、引き続き学友会と調整して継続していく。</li> </ul>

## 4. キャリア教育（進路指導）

4-①	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学校の教職員全体として組織的にキャリア教育（進路指導）に取り組んでいるか。</li> </ul>
取組目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒が様々なことに興味関心を持ち、自らの強みを意識しながら学校生活を送り、自らの進路に対する意識を高めることができるようになる。</li> <li>・生徒が所属集団のなかで、自己理解・他者理解を通じてどのような役割を担うことができるか各種活動のなかで発見し、意識することができるようになる。</li> </ul>
取組内容 と成果	<ul style="list-style-type: none"> <li>・1年生は、外部講師を招聘して、コミュニケーション講座、エンカウンター講座を実施し、人間関係形成力の育成に役立てた。</li> <li>・キャリア講演会を実施し、生徒に今後の自分の進路や生き方を考えさせる機会となった。</li> <li>・日々の学校生活での活動、学級での清掃活動やロングホームルームなどでの班別活動等、2、3年生の「Kamakura Beyond Project」など校内活動において、活動後の振り返りを通じて、生徒自身が自らの強みや得意なことを発見できるように取り組んだ。その結果、低学年は自らの強みを意識することの必要性を理解し、上級学年では自らの強みを生かした活動ができるようになった。特に3年生は「Kamakura Beyond Project」の活動において、自らの強みを高等部生との活動に生かすことができた。また、自らの役割を果たすことで所属集団での自己理解・他者理解を行うことができた。</li> <li>・キャリア教育の中で学習意欲を高めるため、各学年に新たに学習ガイダンスや進路ガイダンスを取り入れた。</li> </ul>
今後の課題 と改善策	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学習ガイダンス、進路ガイダンスを定期的に行うことで、生徒の学習意欲の向上に取り組み、学習の継続と成績の向上に結び付けていく。また、学習ガイダンスや進路ガイダンスは、ベネッセや河合塾と連携して行っていく。</li> <li>・生徒の興味関心が学習意欲や自らの進路意識を高められるようにしていく。</li> </ul>

4-②	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒の適切な勤労観・職業観の形成や社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる能力・態度を育成するための体系的・系統的な指導が行われているか。</li> <li>・職場体験や就業体験が適切に実施されているか。</li> </ul>
取組目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学校生活で、学級や学年などの集団のなかでの自分の役割を理解し、自分が所属している集団に貢献し、貢献することが喜びであることを理解する。</li> <li>・各教科の授業において、生徒が学びと現在の社会を結び付け、興味関心を広げ、自らの可能性を広げることができる。</li> </ul>
取組内容 と成果	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「Kamakura Beyond Project」の活動のなかで、3年生は、企業やNPO法人を訪問して、これらの組織がどのように社会課題を解決し、貢献しているかを知る活動を行い、企業が単なる営利組織ではないことや、組織発足の目的が社会課題にあることが理解できた。</li> <li>・進路ガイダンス等では、新テストを紹介すると共に、AIの進展などで新たな職業観を持つことが大切で、そのためには基盤となる能力や態度を身に付けることが重要であるという話をした。</li> <li>・アクティブラーニングなどの主体的な授業展開で自ら積極的に授業に参加し、授業での学びから生徒が興味関心を広げることができている。</li> <li>・中学生による職場体験が生徒の進路選択を狭めるというキャリア教育学会の報告があるため、前年度同様、職場体験や就業体験は、高等部での取り組みとしている。</li> </ul>
今後の課題 と改善策	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「Kamakura Beyond Project」を始め、学校生活や授業で自ら積極的に取り組み、集団に貢献する喜びを見出せるより良い方法を模索している。</li> </ul>

4-③	<ul style="list-style-type: none"> <li>生徒の能力・適正等の理解のために必要な個人的資料や、進路情報が適切に収集され、活用されているか。</li> </ul>
取組目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>二者面談、三者面談による情報収集と、生徒への助言・指導を行う。</li> <li>日常の学校生活のなかで、生徒の強み、得意なこと、適した役割を把握し、進路学習時に活用する。</li> <li>模擬試験による学力情報の収集と学習スキルの把握をし、帳票返却による学習スキルなどの指導・助言を行う。</li> </ul>
取組内容 と成果	<ul style="list-style-type: none"> <li>二者面談において、生徒とのコミュニケーションを通じて、コミュニケーションスキルや思考の癖、学びやキャリアについての興味の方向性を把握した。その結果、思考の癖や興味の方向性を考慮した進路学習のきっかけを作ることができた。</li> <li>三者面談において、保護者の進路意識や進路知識を把握した。その結果、保護者間で進路意識に大きな差があることが把握できたため、進路ガイダンス等で進路選択に関する共通認識を持たせることができた。</li> <li>模擬試験の帳票を返却する際や授業などで、学習に関する目標設定の方法や学習スキルの指導を行った。その結果、生徒の学習スキルに対する意識の変化があり、目標設定を行う生徒が増えた。</li> <li>ベネッセや河合塾と連携し、模擬試験の帳票の見方やデータの分析方法などの研修を行った。その結果、生徒の学力向上に向けての多面的な理解ができた。</li> </ul>
今後の課題 と改善策	<ul style="list-style-type: none"> <li>ベネッセや河合塾と連携し、職員研修などを通してさらに模擬試験が生徒の力となるよう取り組んでいく。</li> <li>生徒の能力・適正等について情報収集を行うとともに、生徒に対して助言・指導を行うために、「二者面談、三者面談は、必要に応じていつでも実施する」という意識を、引き続き教員、生徒、保護者に提示していく。</li> <li>生徒の学習スキルを把握するため、ポートフォリオを活用し、学習の記録を残す習慣を付け、学校と記録を共有しながら進路学習を進めることができるようにする。</li> </ul>

4-④	・進路相談（キャリア・カウンセリング）が適切に実施されているか。
取組目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・二者面談を利用した構成的な進路学習及びキャリア学習に関する指導と、学校行事や清掃の時間などを利用した非構成的なキャリア学習相談を行う。</li> <li>※中等部からは、原則全員が高等部に進学するため、進学指導的な要素の進路相談は行わない。</li> </ul>
取組内容 と成果	<ul style="list-style-type: none"> <li>・構成的な進路学習及びキャリア学習に関する指導では、進路学習に関する方法の指導と、キャリア学習に関する方向性と考え方の相談を行った。進路ガイドランスでは、新テスト導入に関する情報提供など、学力の三要素を重視した入試に備えることが必要であると説明し、基礎学力と主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度の重要性を伝え、多くの生徒がポートフォリオに活動を記録する習慣が付きつつある。</li> <li>・非構成的なキャリア学習相談では、行事や清掃時の様子から生徒の強みや適性の高い役割を把握し、これらを生かしたキャリアデザインの考え方のヒントを、日常会話のなかに盛り込んでいった。この結果、二者面談で構成的な進路学習及びキャリア学習に関する話題を円滑に話し合うことができた。</li> </ul>
今後の課題 と改善策	<ul style="list-style-type: none"> <li>・進路相談によって生徒が積極的に自分の将来について考えられる方法を検討していく。</li> </ul>



4-⑤	・キャリア教育（進路指導）のための施設設備が整備されているか。
取組目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・進路指導に関する情報発信は、教室の掲示板を利用して行う。</li> <li>・キャリア学習に関する相談について進路相談室を利用して行う。</li> <li>・キャリア学習が進んでいる生徒に対しては、自習室を開放して、将来の進学に向けた準備ができるようにする。</li> <li>・3年生に対しては、大学のオープンキャンパスなどの情報も提示する。</li> </ul>
取組内容 と成果	<ul style="list-style-type: none"> <li>・上級学年の教室に、大学の合同説明会や体験学習を伴うオープンキャンパス情報を掲示して、体験を通じたキャリア意識の育成を促した。その結果、高等学校や大学での学びと社会との結び付きを意識するようになった。</li> <li>・大学受験を意識した学習を自習室で行い、受験を間近に控えた高等部生をロールモデルとして、意識できるようになった生徒もおり、基礎学力の定着のために学習ができる生徒が出てきた。</li> </ul>
今後の課題 と改善策	<ul style="list-style-type: none"> <li>・大学進学への意識付けを更に強化できるように、中等部3年次の学習と高等部1年次の学習を教科内で結び付け、生徒が早く大学受験を意識できるようにする。</li> </ul>

## 5. 生徒指導

5-①	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学校の教職員全体で生徒の状況についての理解を共有し、生徒指導に取り組む体制が整備されているか。</li> </ul>
取組目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒指導計画に基づいた生徒指導を行う。</li> <li>・職員会議において各学年の生徒状況を報告し、生徒の状況について共有する。</li> <li>・生徒指導事案の共有について、情報クラウド（Classi）を有効利用する。</li> <li>・生徒指導関連の連絡・共有事項を情報クラウド（Classi）を用いて、即時的に伝達し、各学年で対応がしやすいようにする。</li> </ul>
取組内容 と成果	<ul style="list-style-type: none"> <li>・『生徒指導ハンドブック』に「生徒指導計画」を掲載し、年度最初の職員会議において指導指針として提示し、指導に一貫性を持たせた。</li> <li>・職員会議において、生徒の状況について学年ごとに報告した。その結果、全教職員が共通認識のもと、生徒を指導・支援することができた。</li> <li>・特別指導案件データベースを用いて、細かな指導案件も教職員内であれば、いつでも開示できる状態になっている。</li> <li>・「Classi」の「生徒カルテ」機能を利用して、生徒指導情報を即時的に共有することができた。</li> <li>・「Classi」の「グループ」機能を利用して、生徒指導関連の連絡・共有事項を即時的かつ効率的に伝達することができた。</li> </ul>
今後の課題 と改善策	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「Classi」の導入により、生徒情報の共有が容易になった。今後は、情報の記録の責任者を明確にするとともに、「Classi」上にすべての情報が記録されるようにしていく。</li> <li>・特別指導案件は、生徒指導部で確実にデータベース化しているので、これを「Classi」の「生徒カルテ」に必ず記録するようにする。また、生徒指導上参考になる事項を学級担任等生徒に直接関わる教職員が確実に記録するように徹底していく。</li> </ul>

5-②	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒指導のための教育相談が計画的に行われているか。</li> <li>・スクールカウンセラー等との連携が効果的になされているか。</li> </ul>
取組目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒一人ひとりの生活状況や心身の状態に関する情報を共有し、生徒の変化に迅速に対応する。</li> <li>・教員、保健室、スクールカウンセラーが相互に定期的な報告、連絡、相談を行うことで、学年単位、学校単位で生徒の心のケアを行う体制を整える。</li> <li>・生徒及び教員が教育相談室を利用しやすい雰囲気づくりを進め、学級・学年の生徒指導に活用できる環境を整える。</li> </ul>
取組内容 と成果	<ul style="list-style-type: none"> <li>・月に1回、定期的にスクールカウンセラー、養護教諭、学年主任などが集まって各学年の生徒の情報を共有し、注意深く生徒の様子を見守ることができた。</li> <li>・スクールカウンセラー、養護教諭、学年主任などそれぞれの立場から生徒の情報を集約することによって、様々な角度から一人ひとりの生徒の状況を把握することができ、生徒指導の場面において適切かつ迅速な対応に役立てることができた。</li> <li>・学年内の連携や学年と保健室との連携により、スクールカウンセラーが対応しなければならない事案に発展する前に適切な対処ができた。</li> <li>・生徒への対応や情報共有については、スーパーバイザーの協力も大きな効果を発揮した。</li> <li>・スクールカウンセラーや保健室からの共有の必要がある情報が、担当教諭や学年主任までに留まり、他の教員が十分状況を把握できていないケースが一部見られた。</li> <li>・新入生の全員面談を行い、全生徒が一度はスクールカウンセラーと話す機会を設けることによって、教育相談室をより利用しやすい雰囲気になってきた。</li> </ul>
今後の課題 と改善策	<ul style="list-style-type: none"> <li>・スクールカウンセラーや保健室からの共有の必要がある情報については、授業や部活動などで気になった場面と合わせて、より多角的に情報集約ができる環境づくりを進めていく。</li> <li>・教育相談室については、今後もだれもが気軽に利用できる場所としてその役割を定着させていく。</li> <li>・スクールカウンセラーの守秘義務もあり、学年で上がった事案について、他の教員に対してどの程度まで情報共有を行っていくか検討していく。</li> </ul>

5-③	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒の問題行動の状況を共有し、適切に対処できているか。</li> </ul>
取組目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「問題行動対応指針」に則り、問題行動に対する指導方法を平準化する。</li> <li>・各学年の特別指導等についての記録は、パソコンで一元的に管理する。</li> <li>・問題行動が発生した背景について十分考慮し、特別指導を行う。</li> <li>・重大な問題行動が起こったとき、教職員間での速やかな情報共有を行う。</li> <li>・学年・生徒指導部・管理職での情報の伝達を円滑に行い、最善の対処を行う。</li> </ul>
取組内容 と成果	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「問題行動対応指針」に則り、教員間での指導を平準化することができた。</li> <li>・問題行動のあった生徒が生徒指導部に提出した「反省文」の内容を必要に応じて管理職と情報共有し、効果的に指導を行うために役立っている。</li> <li>・特別指導案件をパソコン上で一元管理することで、問題行動の傾向を把握することができている。</li> <li>・重大な問題行動が起きた場合に、内容に応じて学年会議、分掌会議、臨時職員会議を開催する準備があり、生徒指導部と連携をとって適切な対応ができている。</li> <li>・問題行動の内容によって、学年処理案件と生徒指導部案件とに分け、適切な対応ができるようにした。重大案件については、学年から生徒指導部を経て管理職へと即時的に報告し、対応することができた。</li> </ul>
今後の課題 と改善策	<ul style="list-style-type: none"> <li>・大きな問題行動の件数が少なく、現状は十分な対応と情報共有ができている。</li> <li>・SNS上のトラブルや家庭内トラブルなどの学校外で起こる問題行動は、顕在化しておらず、把握が難しいが、生徒へのSNSに関する指導等を行うとともに、教職員が様々な新しい問題に対応できるように常に研究・研修を重ねていく。</li> </ul>

5-④	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自ら考え、自主的・自律的に行動でき、自らの言動に責任を負うことができる生徒を育成するための指導を行っているか。</li> <li>・相手の人格を尊重し、豊かな人間関係を構築できる生徒を育成するための指導を行っているか。</li> <li>・社会の一員としての意識（公平、公正、勤労、奉仕、公共心、公德心や情報モラルなど）を身に付けた生徒を育成するための指導を行っているか。</li> </ul>
取組目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒が自発的に考え、行動する機会を増やし、思考力や実践力を高める。</li> <li>・グループ活動等の体験的な学びと教員からの指導を交えて、奉仕の精神や公德心などを養い、互いを認め合い、高め合う雰囲気を構築する。</li> </ul>
取組内容 と成果	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ICT機器を活用するなどして、アクティブラーニングを取り入れた授業が増えた。特に英語科では、トータルテキストトレーニング（TTT）の授業研修のなかで、実践的な英語力が身に付くように工夫した。</li> <li>・体育祭では、保健体育委員や各部活動が企画・運営の中心となり活躍した。また、みどり祭や卒業生を送る会などの行事においても、生徒が主体的・自主的に活動する習慣を身に付け、意欲的に活動した。</li> <li>・「エンカウンター講座」や「ピア・サポート講習会」等を通して、コミュニケーション能力を高めることにより、豊かな人間関係を構築できる生徒を育成することができた。</li> <li>・「Kamakura Beyond Project」を通じて、それぞれの生徒が自分の役割を自覚し、責任のある行動をとること意識した。</li> <li>・情報モラルに関しては、全学年で携帯電話キャリア会社から講師を招き、情報モラルの講座を開いた。また、1、2年を対象にLINEの教育事業を利用し、コミュニケーションの望ましい在り方についてのワークショップを行った。</li> </ul>
今後の課題 と改善策	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒の自主性・主体性は、特別活動や行事のなかで発揮されやすい。その一方で、授業でも生徒の自主的・主体的活動を増やすような授業展開ができるように教員各々が工夫していく。</li> <li>・取り組み内容に単発的なものが多い傾向があるように思われる。「Kamakura Beyond Project」や特別活動を通じて、継続的な取り組みを検討する。</li> <li>・情報モラルの講座、コミュニケーションの望ましい在り方についてのワークショップは、どちらも非常に効果的で、今後も継続的に利用していく。</li> </ul>

## 6. 保健管理

6-①	<ul style="list-style-type: none"> <li>・法定の学校保健計画が作成され、適切に実施されているか。</li> <li>・生徒の保健管理（薬物乱用防止、心のケア等を含む）、保健指導・保健相談が適切に実施されているか。</li> <li>・日常の健康観察や、疾病予防、生徒の自己健康管理能力向上のための取組、健康診断が適切に実施されているか。</li> </ul>
取組目標	<p>【中等部】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・学校保健計画を作成し、適切に実施する。</li> <li>・生徒の保健管理（薬物乱用防止、心のケア等を含む）、保健指導・保健相談を適切に実施する。</li> <li>・日常の健康観察や、疾病予防、生徒の自己健康管理能力向上のための取り組み、健康診断を適切に実施する。</li> </ul>
	<p>【保健センター】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・各教科、分掌と連携して学校保健計画を作成し、適切に実施する。</li> <li>・生徒の保健管理、保健教育、健康相談、保健室経営を適切に実施する。</li> <li>・生徒が自身の健康に関心を持つ機会になるよう、定期健康診断を適切に実施し、事後指導の工夫を図る。</li> </ul>
取組内容 と成果	<p>【中等部】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・保健室と各教科指導の連携により、学校保健計画を速やかに作成し、計画に沿った保健指導を実施することができた。</li> <li>・職員室、保健室、教育相談室を中心に、保護者とも連携を取りながら保健指導、保健相談を行うことができた。</li> <li>・クラス担任、学年主任、教科担当者と保健室が連携して日常の健康観察や心のケアを行った。</li> <li>・年2回の体位測定を始め、年初の健康診断など、適切に実施することができた。</li> </ul>
	<p>【保健センター】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・保健室が主導となり各教科、分掌と連携して学校保健計画を作成し、計画に沿った保健指導を実施することができた。</li> <li>・教育相談委員会を定期開催し、職員室、教育相談室、保健室で生徒の情報把握と対応方針の統一を図った。</li> <li>・学校管理下での災害について、災害共済給付金の手続きを適切に実施した。災害共済給付制度や手続きに関する家庭向け文書を見直し、更新した。</li> <li>・定期健康診断、年2回の体位測定を適切に実施できた。内科検診では、校医の意見も取り入れ、例年より円滑に実施することができた。</li> <li>・検診直後の家庭通知による事後指導だけでなく、夏季休業明けや定期試験後に個別指導を行い、早期治療に繋げることができた。歯科については、映像教材と穴埋め資料を用いて集団指導を行った結果、指導前に約2割だった治療率が5割に上昇した。</li> </ul>

今後の課題 と改善策	<b>【中等部】</b> <ul style="list-style-type: none"><li>・各教科による保健指導は、教科の単元に応じた内容が中心となるため、各教科の横のつながりを更に深める。</li><li>・担任が放課後や休み時間等、生徒と関わることができる時間を十分に取れるよう、業務体系の抜本的な改革に向けて検討する機会を作っていく。</li></ul>
	<b>【保健センター】</b> <ul style="list-style-type: none"><li>・治療率や受診率には、自己の健康への意識の高さも反映される。保健教育の充実と、自己の健康管理能力の更なる向上を目指し、1年生と3年生で保健講話を実施する。</li></ul>

## 7. 安全管理

7-①	<ul style="list-style-type: none"> <li>・法定の学校安全計画が作成され、適切に実施されているか。</li> <li>・学校事故や不審者の侵入等の緊急事態発生時に適切に対応できるよう、危機管理マニュアル等が作成され、活用されているか。</li> <li>・校舎や通学路等の安全点検や教職員・生徒の安全対応能力の向上を図るための取組が定期的に行われているか。</li> </ul>
取組目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学校安全計画を作成し、適切に実施する。</li> <li>・学校事故や不審者の侵入等、緊急事態発生時に適切な対応ができるよう、危機管理マニュアルを作成し、活用する。</li> <li>・校舎や通学路等の安全点検や教職員・生徒の安全対応能力の向上を図るための取り組みを定期的に行う。</li> </ul>
取組内容 と成果	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学校安全計画を作成し、それに則って教育活動を行うことができた。</li> <li>・「防災・防犯マニュアル」を作成し、全校生徒に配付し、防災教育及び防犯教育に活用した。</li> <li>・部活動ごとの活動の特性にかんがみて「各部事故防止対策」を作成し、それに則った活動を行った。重大な事故があったが、顧問をはじめとした職員室教員、保健センターは、十分な対応をとり、事後の生徒のメンタルケアについても相談室の協力を得て、対応することができた。</li> <li>・校舎の安全点検に関してこれまでの方法を見直し、学期ごとに一斉に定期点検を行うようにした。組織的に実施することで校内の不良個所について把握し、施設管理課とも共有し、必要な個所について対応してもらえることができた。</li> <li>・通学路の安全点検については、不審者情報等に基き適宜見回りを行った。</li> </ul>
今後の課題 と改善策	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「防災・防犯マニュアル」について、初版から6年が経過し、内容について再検討・改訂が必要である。特に大地震の可能性が徐々に高まっているなかで、生徒を保護者に引き渡す方法について、規定をもう少し細かく定めることを検討する。</li> </ul>



7-②	・学校防災計画等が作成され、適切に実施されているか。
取組目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・防火・防災計画を整備した上で、有事における安全確保のための基本行動を周知させる。</li> <li>・各家庭にも災害時における基本行動の徹底を図る。</li> </ul>
取組内容 と成果	<ul style="list-style-type: none"> <li>・岩瀬キャンパス全体の防災訓練を2回、防災訓練内で消火器取扱い訓練と屋内消火栓取扱い訓練を各1回行った。また、教職員対象の救命救急講座を1回実施した。</li> <li>・中・高等部独自の「防災・防犯マニュアル」を発行することにより、生徒だけではなく保護者に対しても、防災に関する心構えや基本行動の周知を行うことができた。</li> <li>・防災訓練後の備蓄食糧食事体験等を通して、生徒の災害時の食事に対する意識を高めた。</li> </ul>
今後の課題 と改善策	<ul style="list-style-type: none"> <li>・様々な場面を想定し、併設校各部、総務部、管轄消防署と相談を行いながら、生徒や保護者も含めた有事に対応できるような訓練を今後も継続していく。</li> <li>・岩瀬キャンパス全体の防災訓練を、これまで2回とも消防署立会いのもとで行ってきたが、消防署からの勧めがあり、2019（平成31）年度からは、2回のうち1回を消防署の立会いのない自主訓練の形式で行う予定である。</li> <li>・特定防火対象物のなかでも大規模建物に該当する岩瀬キャンパスにおいて、幼稚部、初等部と連携した安全行動や災害時用備蓄品の管理等を引き続き行っていく。</li> </ul>

## 8. 組織運営

8-①	<ul style="list-style-type: none"> <li>・校長など管理職は、適切にリーダーシップを発揮し、他の教職員から信頼を得ているか。</li> </ul>
取組目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教職員との対話を重視し、意思の疎通を心がける。</li> <li>・教職員の意見や相談には、真摯に応え、良好な職場環境を心がける。</li> <li>・教育活動や校務運営などすべてにおいて、管理職から適切に助言する。</li> <li>・学校運営の方向性を示し、策定した教育ビジョンの実施に取り組む。</li> </ul>
取組内容 と成果	<ul style="list-style-type: none"> <li>・管理職は、全教職員との面談を実施したり、学年・分掌主任などとの話し合いをしたりすることで、意思疎通が図られ、信頼関係が構築されている。</li> <li>・学校運営全般において、管理職の適切なリーダーシップにより、教職員の一体感が保たれている。</li> <li>・管理職は、多くの教職員から種々の相談を受け、またそれに真摯に応えることで、教職員との信頼関係を維持・発展させることができた。</li> <li>・学校案内にも明記された「目指す学校像」の目標に向け、教職員への周知と実践に取り組んだ。その結果、授業や行事など教育活動全般において、生徒が自ら進んで活動する場面が数多く見られるようになった。</li> </ul>
今後の課題 と改善策	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教職員と管理職の信頼関係は、十分に築かれており、今後も継続に努める。</li> <li>・部長、次長のリーダーシップのもと、教職員一人ひとりが学校経営に携わっていることを自覚するよう、いっそうの意識改革を進める。</li> <li>・策定した教育ビジョンの完成には、時間が必要なため、今後も継続していく。</li> </ul>

8-②	<ul style="list-style-type: none"> <li>・校務分掌や主任制が適切に機能するなど、組織的な運営・責任体制が整備されているか。</li> </ul>
取組目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・すべての教員が各校務分掌のいずれかに所属し、組織的な学校運営を行う。</li> <li>・各主任は、校務が確実に遂行されているかを適宜チェックする。</li> <li>・前例踏襲を見直し、現状に即したより良い学校運営を目指す。</li> <li>・管理職との連携を密にし、的確さを欠くことのないように配慮する。</li> </ul>
取組内容 と成果	<ul style="list-style-type: none"> <li>・各分掌内組織で位置づけられた役割を責任を持って取り組むことで、すべての教員各自が学校運営への参画意識を強く持つようになった。</li> <li>・組織的な校務運営の形態が定着し、各分掌主任は、分掌担当者への調整や助言を行った。その結果、ほぼすべての校務内容を的確に遂行することができた。</li> <li>・長年の仕事をそのまま踏襲する傾向に対しては、管理職からの指示により改善を促し、その成果があらわれてきた。</li> </ul>
今後の課題 と改善策	<ul style="list-style-type: none"> <li>・従来から継続されている校務の内容や方法の見直しにより、現状に即した内容に改善が図られた。さらに良い教育現場を目指し工夫を重ねる。</li> <li>・組織としての機能を果たしているが、教職員の意識には、多少の温度差がうかがえる。分掌主任による指揮を高め、仕事内容の質的向上に努める。</li> <li>・管理職への報告・連絡・相談が頻繁に行われているため、学校運営の方向性は一致していると考えられる。さらに個々の教員の資質向上を図り、学校の運営を確固たるものとする。</li> </ul>

8-③	・職員会議等が学校運営において有効に機能しているか。
取組目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・運営会議、職員会議のほか、分掌会議、学年会議を定例化し、校務の内容や現状などを共有する。</li> <li>・運営会議での合意を踏まえ、職員会議での指示・伝達を行い、教育現場での実施などを確実に行う。</li> </ul>
取組内容 と成果	<ul style="list-style-type: none"> <li>・行事予定に学年会議、分掌会議を位置づけているため、会議の定例化が定着し、組織が機能している。</li> <li>・運営会議、職員会議については、必要な時間を確保し、教職員への意思疎通を図った。</li> <li>・会議資料を事前に「Classi」にあげ、いつでも見られるようにした結果、会議内容の周知ができ、円滑な議事進行ができたため、会議時間を縮小することができた。</li> </ul>
今後の課題 と改善策	<ul style="list-style-type: none"> <li>・より良い学校づくりに向け、すべての教員の足並みが揃うよう、組織の一員としての自覚を促し、一致団結した取り組みを行う。</li> <li>・会議の内容を事前に周知することが有効であったため、今後も同様に進める。</li> <li>・学年会議、職員会議等において、教職員全体で共有した情報は、生徒指導等の教育活動に生かされており、今後も情報共有を続けるよう努める。</li> </ul>

8-④	<ul style="list-style-type: none"> <li>・各種文書や個人情報等の学校が保有する情報が適切に管理され、また、情報の取扱方針が教職員に周知されているか。</li> </ul>
取組目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・職員の守秘義務の徹底を図る。</li> <li>・個人情報に関するすべての事柄の取り扱い、慎重かつ適正に扱う。</li> </ul>
取組内容 と成果	<ul style="list-style-type: none"> <li>・個人所有の情報機器の使用及び、デジタルデータの持ち出しを禁止し、情報の漏洩を防いだ。また、成績処理を持ち帰らずに行うことを励行した。</li> <li>・生徒の氏名、住所、成績等一切の個人情報は、教務部で一元管理されている。</li> <li>・年度末に、教育活動で使用した卒業生の生徒カードなど、保存期間のある文書を除いて廃棄した。</li> </ul>
今後の課題 と改善策	<ul style="list-style-type: none"> <li>・今後も引き続き、個人情報管理の徹底に努める。</li> </ul>

## 9. 研修（資質向上の取組）

9-①	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 授業研究を全教員が行うことや、授業研究を継続的に実施することなどを通じ、授業改善に全校的に取り組んでいるか。</li> </ul>
取組目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 教員相互の授業を参観し、互いの授業について検討し、授業改善を図る。</li> <li>・ 授業形態について、従来の一方向的な「講義形式」から「自ら主体的に学ぶ学習」へと転換を図る。</li> <li>・ 生徒が「確かな学力」を身に付けられる授業の実践を図る。</li> </ul>
取組内容 と成果	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 6月と11月に行っている授業研究週間では、中・高等部の教員同士だけでなく、初等部の教員にも授業を公開し、意見交換を行った。</li> <li>・ アクティブラーニングなどによる、生徒の主体性を重視した授業が徐々に広がり始め、授業中の生徒の発言が多くなるなど成果が表れるようになった。</li> </ul>
今後の課題 と改善策	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 各教科ともグループワークやペアワークを取り入れたり、討論・発表の場を設ける等して生徒の主体的な学びを促す授業を実践していく。同時に、基礎学力の定着を確認しながら授業を展開していく。</li> <li>・ 生徒の主体性を重視した授業と、知識習得のための授業という、相反する取り組みのための研究については、十分とはいえず、その検討を進める。</li> <li>・ 生徒の学力向上のために、授業研究、教材研究、専門分野の研究を通して、教員自身の授業力の向上を図っていく。</li> </ul>

9-②	<ul style="list-style-type: none"> <li>・校内研修の課題が適切に設定され、実施されているか。</li> <li>・教職員が積極的に校内研修・校外研修に参加しているか。</li> </ul>
取組目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教員の資質向上や授業改善を中心に校内研修を実施する。</li> <li>・自身のスキルアップのため、積極的に校外の研修に参加する。</li> </ul>
取組内容 と成果	<ul style="list-style-type: none"> <li>・校内研修を各学期1回、合計年3回実施した。</li> <li>・校内研修では、生徒とのコミュニケーションを図るためのスキルアップなど現場で役立つ内容が2回、教員の振る舞いや仕事の改善についての内容が1回行われた。特にコミュニケーションスキル研修の内容は、すぐに実践に結び付いた。</li> <li>・外部の研修参加は、教科や教員により参加の程度が異なっている。研修内容も教科指導以外に、生徒指導、ICT関係、生徒募集など多岐に及んでいるが、いずれもこれからの学校運営や改革に関わる有意義な研修会であった。</li> </ul>
今後の課題 と改善策	<ul style="list-style-type: none"> <li>・校内研修の日程を工夫し、参加できない教員をなくす。</li> <li>・研修については、参加した教員のスキルアップにとどまらず、授業や生徒指導、校務運営に還元できるようにする。</li> <li>・教員により校外研修の参加意識が異なっていることを改善する。</li> </ul>

9-③	<ul style="list-style-type: none"> <li>・校長等の管理職が定期的に授業観察を行い、教員に対して適切な指導・助言をしているか。</li> <li>・教員の指導の状況を的確に把握するとともに、指導が不適切な教員への対応が適切になされているか。</li> </ul>
取組目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・授業参観（学校開放デー）、授業公開週間だけでなく、平素の授業においても部長、次長、スーパーバイザー、教科主任が授業観察を行い適切な指導にあたる。</li> <li>・授業観察で把握できた教員の不適切な指導については、スーパーバイザー、教科主任が担当教員に助言する他、改善がなされるまで次長、部長が指導にあたる。</li> </ul>
取組内容 と成果	<ul style="list-style-type: none"> <li>・授業観察については、スーパーバイザーを中心に行われ、担当教員に、指導上の留意点・改善点が詳細に伝えられた。その後改善されているか否かの確認を部長、次長が行った。</li> <li>・指導が不適切であると指摘された教員の授業内容や方法は、部長、次長等が助言・指導を行い、かなり改善された。また、併せて授業アンケートが実施されたことによって、授業内容の向上に効果的に働いた。</li> <li>・ホームルームでの生徒指導については、単独ではなく複数の職員で、生徒に寄り添った指導を行うよう助言した。</li> </ul>
今後の課題 と改善策	<ul style="list-style-type: none"> <li>・授業観察については、今後も継続して行い、教員の指導力向上を図る。</li> <li>・スーパーバイザーを中心に行われた授業観察を踏まえ、今後は部長等の管理職によって授業観察を行い、指導にあたる。</li> <li>・教科指導に問題が見受けられた教員に対しては、研修への参加などにより質の高い授業ができるよう改善指導を行う。</li> <li>・生徒指導に問題が見受けられた教員に対しては、部長、次長が中心となり助言指導を行う。</li> </ul>



## 10. 保護者・地域社会等との連携

10-①	<ul style="list-style-type: none"> <li>・保護者が学校運営に参画し、協力できる体制を整えているか。</li> <li>・教育ボランティアを集めるシステムができているか。</li> </ul>
取組目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・保護者が行事等を通じて、学校運営に協力できる体制を整える。</li> <li>・必要に応じて外部の教育ボランティアや専門家の協力を得られる体制作りを検討し、その基礎を構築する。</li> </ul>
取組内容 と成果	<ul style="list-style-type: none"> <li>・みどり祭の保護者企画は、前年度に引き続き保護者の自主的な活動が見られ、大変有意義なものとなった。</li> <li>・総合的な学習の時間の「Kamakura Beyond Project」では、外部のボランティアや専門家の講話、指導を導入し、企画の体制作りの検討やみどり祭への事前準備に向けて進展が見られた。</li> </ul>
今後の課題 と改善策	<ul style="list-style-type: none"> <li>・みどり祭の保護者企画は、今後も継続的に行うことで、保護者との連携を密にし、学校と保護者の協力体制を作る場として今後も有効に活用する。</li> <li>・今後も外部のボランティアや専門家を活用し、次の発展につなげていくために、更なる検討や準備を行っていく。</li> </ul>

10-②	・学校公開を定期的に行っているか。
取組目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・授業参観（学校開放デー）や体育祭等の行事を通して、学校公開を定期的に行う。</li> <li>・保護者講座や保護者対象の立居振舞講座等を通して学校と保護者との連携を図る。</li> </ul>
取組内容 と成果	<ul style="list-style-type: none"> <li>・授業参観（学校開放デー）では、実施にあたって、多くの保護者に学校を公開するために、曜日の設定や授業を自由に参観できるように工夫した。</li> <li>・体育祭では、保護者参加種目を設定することで、共に活動する場を設けた。</li> <li>・保護者講座も、保護者と教員が知識を広げつつ、楽しみながら実施できるよう内容を工夫し、円滑な交流の場として機能した。</li> </ul>
今後の課題 と改善策	<ul style="list-style-type: none"> <li>・授業参観（学校開放デー）については、学年が上がっても、参加人数が減少しないように、今後も実際の生徒の学習の様子を見てもらう体制を作っていく。</li> <li>・保護者講座においては、よりニーズの高いものに特化し活性化していく。</li> <li>・次年度も学校開放デーを設けるなど広く公開する体制を継続していく。</li> </ul>

10-③	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒・保護者の学校への満足度や要望を把握するための取組を行っているか。</li> <li>・教育相談体制を整備し、生徒・保護者から寄せられた具体的な意見や要望に、適切に対応しているか。</li> </ul>
取組目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒・保護者のニーズを聞き取り、現状把握を行い、内容を精査し反映させる。</li> <li>・学校生活における生徒の様子や現状を、教員と保護者が共有できる場としての保護者会や保護者懇談会を実施する。</li> <li>・三者面談を通じて、直接担任と生徒、保護者が話し合うことで、生徒の抱える問題や保護者の不安に迅速に対応する。</li> </ul>
取組内容 と成果	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学校生活に関するアンケートを実施したことで、表面化されていないクラス内の傾向を知ることができ、学級担任のクラス運営に役立てることができた。また、いじめの原因となり得る事象の発見や、学級の生徒の思いに気づきやすくなった。</li> <li>・例年、6学年合同の保護者懇談会を実施していたが、議題事項が学年により異なるため、学年ごとに分けて中等部・高等部1年生、2年生、3年生に分けて懇談会を実施した。</li> <li>・学級保護者会は、複数の保護者が一堂に会し、直接話をするのができ、家庭間の情報共有がよりスムーズにできている。必要に応じて、学年保護者会を実施することで学年ごとの話題を共有することができた。</li> <li>・三者面談は、限られた時間内で行われるため、すべての相談ができるわけではない。そのため、必要に応じ、別の日に担任以外にも学年主任、スーパーバイザー、スクールカウンセラーを交えて面談を実施するケースもあった。</li> </ul>
今後の課題 と改善策	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学校生活に関するアンケートについては、項目数の多さ、生徒の回答慣れ等を考慮し、効果的な質問に絞り、簡潔化していく。</li> <li>・学年ごとの懇談会は、議題事項が発達段階に応じたため、保護者が興味・関心を持ち懇談会に参加していた。</li> <li>・保護者懇談会は、学年があがると参加者が固定化される傾向があり、より多くの保護者の意見を把握する方法を検討していく。</li> <li>・三者面談は、時間が限られているため、問題を多数抱えている生徒や家庭については、別日程で面談日を設けるなど、必要に応じて柔軟な対応をしていく。なお、面談前には学年会議を行い、情報共有に努めており、更なる取り組みを行っていく。</li> </ul>

10-④	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学校便りや学級便りの発行など、主として保護者を対象とした情報の伝達・公開が適切に行われているか。</li> </ul>
取組目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・保護者と学校の良い信頼関係を構築していくために、定期的に情報の伝達・公開を行う。</li> <li>・情報提供により、保護者が学校に関心を持ち、学校理解の一つになるようにする。</li> </ul>
取組内容 と成果	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学園全体の広報誌「学園だより」、機関誌「緑苑」、生徒指導部からの「生徒指導部だより」、保健室からの「保健だより」、相談室からの「相談室だより」等を通じて、行事予定、生徒の学校での活動の様子、進学、キャリアの情報、生徒指導上で留意すべき事柄等の情報を定期的に様々な形で提供した。</li> <li>・平成30（2018）年度は、「学年だより」を各学年が発行し、生徒の日常生活の様子、学年の担当からのメッセージ、翌月の行事予定等を掲載した。各学年がその時々伝えたい情報を提供し、特徴がよく出ていた。情報共有のツールとして活用し、大変有意義なものとなった。</li> <li>・前年度の課題を踏まえ、定期的に発行できるように、全学年で発行日の統一を図ることができた</li> </ul>
今後の課題 と改善策	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「学年だより」は、今後も保護者との信頼関係を築く基礎となるよう、掲載する内容については、保護者の視点に立って情報を選んでいくとともに、生徒にも興味を持って読むことができるものを提供していく。</li> <li>・より多くの教員が「学年だより」作成等の情報発信に関する業務に携われるように学年や分掌内での業務分担の見直しを図る。</li> </ul>

10-⑤	・地域の自然や文化財、伝統行事などの教育資源が活用されているか。
取組目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・総合的な学習の時間や校外学習の時間を利用し、鎌倉の自然や文化財に触れる機会を積極的に増やし活動する。</li> <li>・「赤い羽根」等のボランティア活動を通じて地域社会との連携を深める。</li> </ul>
取組内容 と成果	<ul style="list-style-type: none"> <li>・1、2年生は、校外学習を通じて鎌倉の神社、仏閣について事前学習をした上で、グループ活動を実施した。</li> <li>・全学年が校外学習で訪れた小田原の「生命の星・地球博物館」において、地球や動植物の展示を見学した。</li> <li>・赤い羽根募金等に意欲的に協力し、各クラスの委員を中心に積極的に活動した。</li> </ul>
今後の課題 と改善策	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地域社会との連携をよりいっそう強めるために、企業や外部の専門家の導入について、検討していく。</li> <li>・募金の意義や必要性及び地域社会との連携について丁寧に説明し、より自主的な活動につなげていく。</li> </ul>

10-⑥	・教育実習生の受け入れ体制が十分に整っているか。
取組目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教育実習期間や取組内容を確立させた上で、自覚を促すために事前に十分に学校として指導を行う。</li> <li>・教育実習生が生徒の前で、教員としての自覚をもち、自発的に行動できるよう担当教諭を中心に指導する。</li> </ul>
取組内容 と成果	<ul style="list-style-type: none"> <li>・実習前に事前のガイダンスを行い、教育実習生の自覚と意思を確認して取り組んでもらうことができた。</li> <li>・実習生は、実習開始直後に部長・次長から実習を行う際の心構えの説明を受け、実習に臨んだ。</li> <li>・教科指導と学級指導だけでなく、生徒への接し方や実習日誌の記入についても、それぞれの担当教員が適切に指導しているため、実習期間で学生に大きな成長が見られた。</li> </ul>
今後の課題 と改善策	<ul style="list-style-type: none"> <li>・事前のガイダンスで、実習の重要性と、それを乗り越えるだけの努力が必要であることを、十分に学生に説明していく。</li> <li>・実習生の受け入れ人数について、前々年度と比べ大幅な減少が見られるが、担当教員1名につき実習生1名の体制がきめ細かい指導をするための理想であり、と考える。</li> </ul>

## 11. 入試・広報活動（情報提供）

11-①	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学校の教育活動についての説明会を実施したり、学校案内を配付したり、ホームページを活用するなど、学校に関する様々な情報が、多様な媒体を用いて分かり易く、かつ適切な分量で提供されているか。</li> <li>・ホームページに校長名、学校の所在地、連絡先、学級数、生徒数、教育課程などの基本的な情報が提供され、情報が定期的に更新されているか。</li> <li>・生徒等の個人情報の保護と積極的な情報提供とのバランスに配慮しているか。</li> </ul>
取組目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・校内説明会では、十全な準備と円滑な運営を心がけ、魅力ある説明会を実施する。</li> <li>・生徒募集活動では、定員の充足を目指し、訪問活動を積極的に実施する。</li> <li>・ホームページ等のインターネット媒体を通して、学校についてのタイムリーな話題を迅速且つより広範囲に発信する。</li> <li>・ダイレクトメールや学校案内等送付など紙媒体の広告活動を増やし、情報の受信環境に影響されることなく学校情報を伝える。</li> <li>・教育関連雑誌等に学校情報を広告掲載することで、中学受験に関心を持つ受験生や保護者に広く本校について知ってもらう機会を作る。</li> <li>・来校した受験生に明確でわかりやすい情報を提供するとともに、本校の受験につながるような、受験生の強い関心を引く説明や相談を行う。</li> <li>・来校者の個人情報を適切に管理し、十分に配慮して保護をする。</li> </ul>
取組内容 と成果	<ul style="list-style-type: none"> <li>・校内説明会については、前年度よりも実施回数を増やすとともに、学校体験で実施する教科数を充実させるなどして、初めての受験生でも来校しやすい環境を作ることができた。そうした取り組みもあり、平成29（2017）度よりも実来校者は増加した。</li> <li>・塾訪問においては、広報担当4名で地域を分担して訪問することで、より広範な地域の塾訪問を実施することができた。重点地域に関しては、時期を設定して複数回訪問することで認知度を高め、また説明会に来校した受験生の出身塾や入試出願者の出身塾については、来校後や出願後に迅速に訪問することができた。</li> <li>・ホームページについては、説明会の情報や日々の学校活動を適宜掲載することができた。また、平成30（2018）年度から始まった本校の教育内容や新しい取り組みについては、更新が遅れないように配慮した。</li> <li>・説明会やみどり祭等の、受験生が来校するイベントについては、すべてダイレクトメールを発送し、来校を促すことができた。ダイレクトメール発送の時期については、直前になることもあったが、期日には間に合うように発送した。</li> <li>・雑誌の掲載広告については、受験雑誌に、平成30（2018）年度から始まった「教育の3本柱」を中心に本校の魅力を掲載した。</li> <li>・説明会等で来校した受験生には、説明会後に校内施設見学や個別相談へ積極的に促すことができた。また、夏季休業期間中などにも個別に見学に来校した受験生や保護者が数名いた。</li> <li>・来校者の個人情報に関しては、共有するファイルに入力する形式で管理し、入力内容に不備がないように配慮した。</li> </ul>

今後の課題 と改善策	<ul style="list-style-type: none"><li>・校内説明会では、新規来校者とリピート来校者の双方が満足できる説明会のあり方を再検討する。柱となる本校の教育活動については、どの説明会においても継続して説明を行いつつ、在校生の様子を紹介するなど、その時期に一番旬となる情報を提供できるように毎回内容の工夫に努める。</li><li>・塾訪問については、塾の訪問地域や訪問回数を増やすだけでなく、各教室を統括する本部の訪問なども積極的に行う必要がある。各教室で本校を紹介してもらえるように、訪問担当者は管理職に同行して丁寧に教育内容や入試の概要について説明していくことを検討したい。</li><li>・ホームページについては、新年度のパンフレットに合わせて平成31（2019）年度に大きく内容を変更する予定である。令和3（2021）年の新校舎移転に関しても新たなページを作成して掲載できるように準備を進めている。</li><li>・ダイレクトメールの完成を説明会実施の1か月前に設定し、内容の検討から発送まで十分時間に余裕をもって行うようにスケジュールを組み立てる。</li><li>・雑誌の掲載については、受験雑誌に限らず、新聞広告や大衆雑誌の記事など、より多くの人目に触れる媒体への掲載を視野に入れて内容を検討していく。</li><li>・来校した受験生や保護者が再び来校したくなるように、一人ひとりへの声かけと丁寧な個別相談を心がける。また、随時個別見学が行っていることを様々な場面で告知していく。</li><li>・来校者の個人情報、入力後に必ず入試広報主任が確認する。また資料の発送前などには、複数の担当で受験生の住所等のデータを点検した上で、発送作業に取りかかる。</li><li>・長期休業期間中に随時個別見学に応じる旨をホームページ等で積極的に紹介する。</li></ul>
---------------	---



11-②	<ul style="list-style-type: none"> <li>・中等部の募集力向上に向けた改革における事務支援が適切に行われているか。</li> </ul>
取組目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・中等部入試広報担当教員の業務補佐と支援の充実を図る。</li> <li>・募集人員充足に向け、①学校案内制作、②ホームページの運用、③他校入試・広報関連の情報収集、④学習塾訪問頻度向上等の支援活動等を行う。</li> </ul>
取組内容 と成果	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学校案内、ポスター制作の支援を行った。入試広報担当教員と制作業者とをつなぐ役割として、学園として求められているものや中等部・高等部が目指す教育方針や教育方法について、制作業者と共有し、よりよい提案を引き出せるよう配慮した。</li> <li>・接続教育推進プロジェクト会議を開催した。事前に議題を通知し、資料作成依頼段階で各部教員と共通認識を持つことで、会議当日は有意義な議論が行えるよう配慮した。幼稚部から高等部までの現状と課題を共有し、各部の戦略的な募集力向上を図った。</li> <li>・初等・中等接続教育担当部長の塾訪問の予定を共有し、資料等の準備をサポートした。効率的・効果的な訪問が可能となるよう、学内の事務手続きを補佐し、担当部長の事務負担を軽減した。</li> <li>・上述の通り、募集人員充足に向けた取り組みまたは支援を行ったが、入学者は定員に満たなかった。</li> </ul>
今後の課題 と改善策	<ul style="list-style-type: none"> <li>・計画的な募集活動の補佐に加え、教育活動を効果的に伝える学校説明会の運営の支援等を行い、志願者数の増加を図る。</li> <li>・学習塾に対する告知の増強を図る。塾講師へ中等部の優位性を強く発信する。</li> <li>・初等部・中等部間の進学接続支援に努める。</li> <li>・ホームページの情報更新について、時機を逃さず計画的に行う。</li> <li>・初等・中等接続教育担当部長がより募集活動に専念できるよう、引き続き事務手続き等のサポートを行う。</li> </ul>

## 12. 教育環境整備

12-①	<ul style="list-style-type: none"> <li>多様な学習内容・学習形態などに対応した施設・設備の整備が行われ、活用等が適切に図られているか。</li> </ul>
取組目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>音楽室、美術・工芸室、書道室、情報処理演習室、調理実習室、家庭科室（被服）、物理・地学室、化学室、生物室など各特別教室を有効活用する。</li> <li>各教室や特別教室に設置された電子黒板を有効活用する。</li> <li>電子黒板活用のノウハウの学校全体での共有を進める。</li> </ul>
取組内容 と成果	<ul style="list-style-type: none"> <li>音楽室、美術・工芸室、書道室については、各教科の授業で活用した。特に、2つある音楽室は、合唱の練習などの際に、パート別に分かれ2カ所とも有効に活用した。</li> <li>情報処理演習室については、授業のほか、総合的な学習の時間などにも活用した。</li> <li>家庭科では、調理実習室、家庭科室（被服）とも実習等で、頻繁に活用した。</li> <li>理科室も環境整備が整ったことから、実験で多用するようになった。化学室のドラフトチャンバーも実験の際に活用した。</li> <li>各教員がタブレット端末を持つようになったことから、パワーポイントなどで授業を進める科目がより増え、前年度以上に教室の電子黒板を多用していた。また、動画や画像、ホームページなどの視聴覚教材を使用する際にも多く活用し、パワーポイントを用いた生徒の発表の際にも有効に使用した。</li> <li>電子黒板やタブレット端末などの活用のノウハウについては、徐々に浸透しつつある。</li> </ul>
今後の課題 と改善策	<ul style="list-style-type: none"> <li>各教科や総合的な学習の時間などで、充実した施設を有効に活用している。今後は、教科を横断した活用などを模索し、より有効な活用を行っていく。</li> <li>電子黒板やタブレット端末で使用したコンテンツを、個人や教科内だけでなく、学校全体で共有する方策を考え、活用をより充実したものにしていく。</li> <li>総合学習などの学年を越えた学習活動の際の、大教室や演習室での電子黒板などの視聴覚教材の利用法について、引き続き検討していく。</li> </ul>

12-②	・施設・設備の安全・維持管理のための点検及び整備が行われているか。
取組目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・施設・設備の安全を確保する</li> <li>・施設・設備の機能を維持する。</li> <li>・より快適な環境で生徒が学校生活を送れるよう環境整備を行う。</li> </ul>
取組内容 と成果	<ul style="list-style-type: none"> <li>・年次、月次、日常の点検により施設・設備の状況を把握し、不具合に対処した。</li> <li>・職員の日常作業の他、清掃・樹木管理、プールの保守点検等業者への委託による環境整備・安全確保等も行っている。</li> <li>・空調設備等設備機器の経年劣化による不具合への対応を行った。</li> <li>・屋上防水については、昭和62（1987）年竣工から築31年経過し、防水層の経年劣化や目地部分の剥れがみられるため、屋上シート防水工事を行った。</li> <li>・ブロック塀を撤去し、フェンスを設置する安全対策工事を行った。</li> <li>・岩瀬キャンパスに保管しているPCB安定器分別作業、濃度分析を行い、平成31（2019）年度初旬には処分完了予定である。</li> <li>・プール棟浴槽内のタイル下地に浮きがみられたため、安全対策工事を行った。</li> <li>・敷地北側法面の安全対策として、大規模な樹木剪定を行った。</li> <li>・創立80周年記念事業に備えて、敷地測量調査、ボーリング調査、電波障害調査、地歴調査を行った。</li> </ul>
今後の課題 と改善策	<ul style="list-style-type: none"> <li>・年次、月次、日常の点検による施設設備の安全管理を継続する。</li> <li>・委託業務の内容等が実状に合わせたものになるよう見直しを図る。</li> <li>・創立80周年記念事業として岩瀬キャンパス再整備を計画している。その内容を踏まえて設備整備計画を見直し、実行する。</li> </ul>

12-③	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教材・教具・図書の整備や学校教育の情報化が適切になされているか。</li> </ul>
取組目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・様々な教育活動の目的に適う場所や教材・教具・図書などの教育環境を整備する。</li> <li>・パソコンや情報機器のマルチメディア性を生かし、教育活動の情報化を推進する。</li> <li>・情報機器活用のノウハウの学校全体での共有を進める。</li> </ul>
取組内容 と成果	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学習室、マルチメディアラウンジの電子黒板や、情報処理演習室、マルチメディアラウンジのパソコンも有効に活用されている。</li> <li>・パソコンの台数が足りない時は、タブレット端末で補って活用している。</li> <li>・マルチメディアラウンジにプリンターが設置され、総合学習や発表の準備などで、生徒に活用されている。</li> <li>・図書室では、継続的に蔵書数や映像教材の更なる充実を図った。</li> <li>・各教室に設置された電子黒板は、ほぼ全教科において活用されるようになった。</li> </ul>
今後の課題 と改善策	<ul style="list-style-type: none"> <li>・今後の総合学習（Kamakura Beyond Project）などの活動を考慮し、現在使用している情報処理演習室、マルチメディアラウンジ、学習支援センターEの他にも、パソコンの台数・場所ともに計画的に増やすことを検討していく。</li> <li>・情報処理演習室と学習支援センターEは、通常は施錠されているため、生徒が自由に使用できるマルチメディアラウンジのパソコンについては、常にすべてのパソコンが稼働できるように、引き続き整備を行っていく。</li> <li>・生徒各自がタブレット端末を持つことを考慮したうえで、パソコンとタブレット端末の両方を効果的に活用する方策を模索・検討していく。</li> <li>・教育活動でのパソコンや情報機器を利用した情報化については進んでいるが、利用方法についてはより効果的な更なる工夫と、それらを共有するための組織的なシステム作りを進めていく。</li> <li>・図書館に関しては、新校舎計画と並行して、図書委員会による図書管理などの方策を検討していく。</li> </ul>

## 13. 事務支援体制

13-①	・ 中等部の教育活動における支援が適切に行われているか。
取組目標	・ 日常業務における事務支援体制全体の強化を図る。
取組内容 と成果	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 窓口での来校者や電話での各種問合せについては、「窓口は学園の顔」という言葉を常に意識し、適切かつ丁寧な対応に努めた。</li> <li>・ 業者支払いの勘定伝票や預り金についての新たな帳票を、引き続き初等・中等教育支援室で作成し、事務処理の合理化・厳格化を一層いっそう進めることができた。</li> <li>・ 校友会費処理についても、経理部の指導のもと、改善を進めた。</li> <li>・ 昼食時におけるカフェテリアでの食事の提供について、総務部や関係各部と相談し、取扱業者の見直しを行った。更にこれまでの対面販売方法から自動販売機での販売方法に変更した。これによって、食事提供での補てん金が不要となり、昼休み以外の時間帯でも食品を提供することができるようになった。</li> </ul>
今後の課題 と改善策	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 外部との対応に関して、今後も引き続き適切且つ丁寧な対応を心がける。</li> <li>・ 預り金の厳格化については、経理部や総務部、各部と連携し、引き続き対応を図っていく。</li> </ul>

## 14. 自己点検・評価

14-①	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自己評価が年に1回以上定期的に実施されているか。</li> <li>・全教職員が評価に関与しているか。</li> </ul>
取組目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・年度末に当該年度に実施した教育内容を振り返ることとし、次年度に生かせるように自己点検・評価を実施する。</li> <li>・自己点検・評価報告書の作成は、分掌主任を中心に中・高等部の全教職員で行う。</li> </ul>
取組内容 と成果	<ul style="list-style-type: none"> <li>・分掌主任や教科主任を中心に点検項目にしたがい、すべての教育内容について成果や達成状況などを点検し、次年度に向けての改善点を洗い出した。</li> <li>・報告書の作成においては、部長・次長と分掌主任を中心に教科主任や学年主任から指示する形で、全教員が振り返りを行い、次年度の工夫や改善に生かすことができるようにした。</li> <li>・各データについては、その都度整理することで、年度統計に反映しやすくすると同時に、年度の途中状況もわかりやすくなった。</li> </ul>
今後の課題 と改善策	<ul style="list-style-type: none"> <li>・担当者ごとに作成された自己点検・評価の内容確認に比較的時間を要するため、元となる事実やデータをより正確に記録するよう努める。</li> </ul>

14-②	・自己評価の結果が具体的な学校運営の改善に活用されているか。
取組目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自己点検・評価の結果を受けて、改善すべき点について、次年度に生かす。</li> <li>・取組内容に関して成果が表れているものについては、さらに工夫を凝らしながら次年度以降も継続して実施する。</li> </ul>
取組内容 と成果	<ul style="list-style-type: none"> <li>・前例踏襲を是とせず、現状に即した取り組みを推進したが、教員各自の考え方に幾分温度差が見られた。</li> <li>・成果に結び付いていない、または目に見える結果が表れていない教育内容については、十分な検討を重ねた上で、その理由の検証を行った。</li> <li>・教育内容を細部にわたり点検し、次年度の教育活動に生かすことができた部分もあり、徐々に改善されてきた。</li> </ul>
今後の課題 と改善策	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教育内によっては、すぐに目に見える結果が出ないものもあるが、学校教育目標に基づき、教育内容を抜本的に見直し、スピード感をもって改革にあたる。</li> </ul>

## 第2章 高等部 自己点検・評価

### 1. 教育目標

1-①	<ul style="list-style-type: none"> <li>・設置者の示す明確な教育方針（建学の精神）等に基づいて教育目標を設定し、教育活動その他の学校運営を行っているか。</li> </ul>
取組目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・平成30（2018）年度を始めるに当たり、3月末の校内研修会で平成29（2017）度策定した「教育の3本柱」の中に、これまでの学校改革の取り組みを再構築して全校の教職員に示すとともに、その内容の充実を図った。3本柱の内容は、次のとおりである。</li> <li>・「建学の精神にもとづき豊かな人間性を育む」とする。</li> <li>・「自立して活躍できる確かな学力を育む」とする。</li> <li>・「国際社会で活躍できる語学力・表現力を育む」とする。</li> </ul>
取組内容 と成果	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「建学の精神にもとづき豊かな人間性を育む」では、新入生を対象とした外部講師による「コミュニケーション講座」「エンカウンター講座」が2年目を迎え全校の3分の2の生徒が受講したことになった。講座の内容は、建学の精神が目指すものとの共通項が多く、生徒にとっては有意義な機会となっている。</li> <li>・「自立して活躍できる確かな学力を育む」では、基礎学力の定着に向けて、日々の授業はもとより朝、帰りのショートホームルームの活用、放課後の学習支援センターを運営する提携予備校との連携強化を通して、取り組みを深めることができた。家庭学習の定着については、朝のショートホームルームを活用し、1週間の学習を振り返る「週プラン」の取り組みを始めたことで、生徒の意識も高まってきた。</li> <li>・「国際社会で活躍できる語学力・表現力を育む」では、新しい英語教育プログラム「鎌倉FITS」の多岐にわたるプログラムの充実を図り、パソコンやiPadなどのICT機器を使って「語学力」の取り組みを行った。</li> </ul>
今後の課題 と改善策	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「豊かな人間性」については、時代に即したものとなるよう、絶えず振り返りをしていかなければ、旧態依然としたものから抜け出すことが難しい。教職員の更なる意識改革を進める。</li> <li>・「確かな学力」と「語学力」の育成については、取り組みの成果を進路実績等とおして示していく必要があり、募集力の強化に直接結びつく取り組みとして学校全体で取り組む。</li> </ul>



1-②	<p>・学校の状況を踏まえ重点化された中・短期の目標が定められているか。</p>
取組目標	<p>年度当初に部長が全職員に示す「取組方針」として以下の目標を設定する。</p> <p>①学力向上、進学実績向上の取り組み</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・平成30（2018）年度から導入する学習コンテンツ「Classi」を活用し、生徒のモチベーションを引き出し、自学自習の力を付けるとともに、教員も「生徒カルテ」などの機能を利用し、授業内容や指導方法の質的向上に取り組む。</li> </ul> <p>②教員研修及び業務改善の推進</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・研修及び業務改善（働き方改革を含む）を推進する特設チームを校務分掌組織に位置付け、必要性や優先順位などを勘案し、講師の選定も含めて校内研修の質的向上に取り組む。</li> </ul> <p>③英語教育の充実</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・英語学習指導アドバイザー（金谷東京学芸大学名誉教授）の招聘による英語科教員の研修及び授業プログラム開発の成果を生かし、鎌倉FITSプログラムに基づく新たな英語教育を展開する。</li> <li>・2月に姉妹校提携を行ったブリジディーン・カレッジ（オーストラリア）とのさらなる人的交流など、多彩なプログラムによる本校独自の魅力を構築する。</li> </ul>
取組内容 と成果	<ul style="list-style-type: none"> <li>・① 学力向上、進学実績向上の取り組みについては、平成30（2018）年度から導入した学習コンテンツ「Classi」を活用し、生徒のモチベーションを引き出すとともに、教員にもこれらの機能を活用し授業内容や指導方法の質的向上に取り組む姿勢が見られるようになった。</li> <li>・学習コンテンツ「Classi」の活用については、進んで取り組む学年や教員の姿が見られたが、まだ、活用のチャンスやスキルが十分ではない教員も見受けられた。</li> <li>・② 教員研修の充実による指導力向上のために、生徒の「コミュニケーション講座」講師から2回にわたり「コーチング研修」を開催した。また、業務改善の一環としてそれぞれに支給されたタブレットを用いて職員会議をペーパーレス化した。</li> <li>・③ 英語教育の充実については、姉妹校ブリジディーン・カレッジ（オーストラリア）におけるターム留学（夏期）とニュージーランドにおけるターム留学（冬期）の新制度による本校独自のプログラムに生徒が参加した。またブリジディーン・カレッジとの相互交流の一環として卒業生を受け入れる取り組みを始めることができた。</li> </ul>
今後の課題 と改善策	<ul style="list-style-type: none"> <li>・平成30（2018）年度から導入した学習コンテンツ「Classi」の活用については、今後、実践事例などを教科会等で共有し、授業の充実を図る。また、「生徒カルテ」の機能については、個人面談などでの活用を促していく。</li> <li>・英語学習指導アドバイザーのもとで得た、指導法や授業プログラム開発方法についての知識や経験を踏まえ、より発展的な英語教育を展開していく。</li> <li>・今後、海外の語学研修のプログラム充実を図るためには、英語科教員だけでなく、広く本校教員の中に留学に関する知識を持った担当教員を増やし、制度の継続や充実を進める。</li> </ul>

## 2. 教育課程

2-①	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学校の教育目標を踏まえて教育課程が編成・実施され、その考え方について教職員間で共有されているか。</li> </ul>
取組目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自立して活躍できる確かな学力を育むための取り組みを強化する。</li> <li>・生徒の学力向上に向け、より内容の充実した授業改善に取り組む。</li> <li>・大学受験合格実績の向上を目指す。</li> </ul>
取組内容 と成果	<ul style="list-style-type: none"> <li>・すべての生徒が1週間の学習計画を立て、実際に行った学習内容を記録する「週プラン」を活用したことで、自立した学習を促すことができた。</li> <li>・生徒が自立して活躍できる確かな学力を育むため、教員各自が外部研修に参加し、スキルアップを目指した。</li> <li>・受験を意識した授業を展開しつつ、同時に基礎学力不足の生徒に対しては、きめ細かな指導も行った。</li> <li>・生徒の学習状況を把握し、定期的に生徒と面談をするなど、学習指導や進路指導の充実を図ったが、合格実績はほぼ例年並みだった。</li> </ul>
今後の課題 と改善策	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒の学力を更に向上させるために、知識・理解、思考力・表現力の向上を目指した授業改善に取り組む。</li> <li>・教員の指導技術の向上に向けた研修参加を充実させるとともに、授業への還元を目指す。</li> <li>・大学受験に意欲的に挑戦する環境作りに取り組む。</li> </ul>

2-②	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教育課程の実施に必要な、各教科・総合的な学習の時間・特別活動の年間指導計画や週案などが適切に作成されているか。</li> </ul>
取組目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・シラバスに記載した内容を遵守し、学力向上に向けた取り組みを実施する。</li> <li>・各学年において、4月初旬に総合的な学習の時間、ロングホームルームの年間計画を立てる。</li> </ul>
取組内容 と成果	<ul style="list-style-type: none"> <li>・年間学習指導計画表は、各教員が担当する授業それぞれについてすべて作成し、計画的に授業が行われた。</li> <li>・年間学習指導計画表は、学期ごとに「自己評価」及び「今後の課題と対策」を記入し、報告することで、授業改善に努めた。</li> <li>・ロングホームルームは、各学年の行事や進路指導を中心に、総合的な学習の時間は、3年次を除き、起業家教育の取り組みを中心に、計画・実施することができた。</li> </ul>
今後の課題 と改善策	<ul style="list-style-type: none"> <li>・年間学習指導計画どおりに授業を進められるよう、授業の進め方や学習指導方法などを検討し、必要に応じてシラバスの見直しも検討する。</li> <li>・ロングホームルームでは、行事の準備だけでなく、進路研究などの機会をより充実させる。</li> <li>・総合的な学習の時間では、生徒の主体性を第一に、起業家教育の活動をより充実発展させていく。</li> </ul>

2-③	<ul style="list-style-type: none"> <li>・必要な教科等の指導体制が整備され、授業時数の配当が適切に行われているか。</li> </ul>
取組目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・主に私立大学受験を目標とし、受験科目を重点的に学べるように、3年次の2学期には必要な内容を終え、さらに問題演習の時間も確保する。</li> <li>・管理職及びスーパーバイザー（経験豊富なベテラン教員）による授業参観や、教員同士の相互参観を行う。</li> </ul>
取組内容 と成果	<ul style="list-style-type: none"> <li>・2年次より、文系、理系のコース選択を行うことで、歴史や理科において、受験に必要な選択科目を2年間継続して学ぶことができた。</li> <li>・学校設置科目の特講授業を設置して、問題演習の時間を増やしている。</li> <li>・鎌倉女子大学への内部進学者の実力を上げるため、2・3年次で鎌倉女子大学進学希望者のクラスを設け、学級活動として基礎学力の向上を図った。</li> <li>・鎌倉女子大学進学希望者には、高大連携講座や教養講座を設けた。教養講座については、進路変更に対応するためカリキュラム上には置かないが、時間割に組み込んだ講座とした。</li> <li>・授業確保のため、①すべての入試日に授業を行った。②体育祭予行日は午前中授業とし、体育祭準備は放課後に行った。③2学期始業式に模擬試験を行い、授業日を増やした。④3学期始業式に授業を行った。⑤みどり祭準備は2日間で行った。⑥健康診断日の午後に授業を行った。⑦1学期の終業式の翌日から5日間、全員参加の夏期集中授業を設定した。⑧夏期講習会、冬期講習会を行った。⑨三者面談を中間試験後から期末試験後の行事日の午後に移し、期末試験前の授業を確保した。</li> <li>・体験活動などの校外学習や学校行事も重視しているため、各科目において、丁寧な説明を行う時間及び問題演習の時間を十分取れるように、単位数を増加している。特に、2・3年次の歴史や理科については、標準単位数の2倍で設定して十分な授業数を確保した。また、定期試験の4週間と祝日や行事による実授業数減分を補うため、37週で授業計画をして授業数増加に努めた。</li> <li>・公開授業週間を設け、教員同士の相互参観を促進した。</li> <li>・適宜、行事と授業の関連付けを考慮した。</li> </ul>
今後の課題 と改善策	<ul style="list-style-type: none"> <li>・今後、授業時間数の確保のため、行事の見直しを検討する。</li> <li>・短縮授業や半日授業などで、可能な限り行事日も授業を行う。</li> <li>・管理職及びスーパーバイザーによる授業参観や相互参観によって得られた知見を、今後の指導に反映する。</li> </ul>

2-④	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒の学習について観点別学習状況の評価や評定などの基準が設定されているか。</li> </ul>
取組目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学年やクラスなど生徒個々の学習状況に応じ、生徒の学習を多面的に評価するために、定期試験の点数以外に、日頃の学習の取り組み等を対象に加えて評価する。</li> <li>・客観性と公平性を十分に担保した上で、進学クラスと特進・選抜クラスでは、試験問題を原則として分け、さらに目標とする平均点を<math>60\pm 5</math>点と定め、問題の適正化を図る。</li> </ul>
取組内容 と成果	<ul style="list-style-type: none"> <li>・高等部では、観点別学習状況の評価は実施していないが、定期試験以外に、グループワーク、実験、実習、実技試験及び、小テスト、レポート等の提出物も評価に加えている。</li> <li>・各学期の10段階評価及び学年の5段階評定は、教務部で定めた点数の区分表に当てはめて算出し、どの科目においても、同じ100点法の点数であれば、同じ評価や評定が付くようにした。しかし、教科によっては定期試験の素点が低く、100点法算出の際に平均点の調整が行われた。</li> <li>・定期試験の問題の一部を進学クラスと特進・選抜クラスとに分け出題し、学力向上に寄与するとともに、評価の公平性を担保するため、難易度の高い出題がされる特進コースでは、共通問題の得点率の差を用いて加点措置を行った。</li> </ul>
今後の課題 と改善策	<ul style="list-style-type: none"> <li>・定期試験の平均点をどの教科も<math>60\pm 5</math>点に近づけていくために、日頃から生徒の理解度を図り、問題作成に生かしていく。</li> <li>・特進・選抜クラスでは、大学受験に備えて、難易度の高い問題も出題しているが、今後は進学クラスでも模試や受験を意識した出題を増やしていく。</li> </ul>

## 3. 学習指導

3-①	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学習指導要領や設置者が定める基準（学則）にのっとり、学校全体として、生徒の発達段階や学力、能力に即した指導が行われているか。</li> </ul>
取組目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・高等部3年間を見越した各教科の学習指導計画の構築を図り、本校の実態に即した教科教育を行う。</li> </ul>
取組内容 と成果	<ul style="list-style-type: none"> <li>・高等部入学試験後も学習の目標を失うことなく学習意欲や学習姿勢を維持するために、入学前課題や新入生試験に取り組むことで、基礎学力の定着だけでなく苦手分野の克服を図ることができた。</li> <li>・授業では、必要に応じて過年度の学習内容を含めたり、教科書外の内容に言及したりと基礎学力の定着と学力向上を図った。</li> <li>・従来の板書による授業やプリント学習に加え、電子黒板の活用など、わかりやすい授業を目指した。</li> </ul>
今後の課題 と改善策	<ul style="list-style-type: none"> <li>・今後の学習指導要領の改訂に適切に対応できるように、現在の学習指導計画を見直し、シラバスに反映させていく準備に取り組む。</li> <li>・中学校時代の学習内容が十分に身に付いていない生徒に対しては、学習支援センターの活用以外にも、授業内で中学校での学習内容を扱う等、基礎基本を身に付けた上で、高等学校の学習内容の理解につなげていく。</li> <li>・従来型の講義形式に比べて、生徒主体型による授業は、生徒の授業への参加意識が高く、学んだ内容の認識度が良いため、より多くの授業で取り入れていく。</li> </ul>

3-②	<ul style="list-style-type: none"> <li>生徒の学力・体力の状況を把握し、それを踏まえた取組が行われ、PDCAサイクルに基づいて適切に改善されているか。</li> </ul>
取組目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>生徒が自ら学び、考え、行動できるようになるために、「書く・記録する」、「時間を意識する」、「考える」の3つの基本動作を習慣化し、自己管理能力を身に付ける。</li> <li>大学受験に備えて、学力の向上を図る。</li> <li>各種検定試験における目標級の取得を目指す。</li> </ul>
取組内容 と成果	<ul style="list-style-type: none"> <li>「Classi」の「学習記録」や「フォーサイト手帳」を活用することで、主体的な学習姿勢を身に付けるだけでなく、家庭学習の習慣化を図った。</li> <li>二者面談や三者面談では、「Classi」の「生徒カルテ」を活用することで生徒一人ひとりに応じたきめ細かい指導を行うことができた。</li> <li>「Classi」のポートフォリオ機能を利用し、学校生活のなかで得た学びを記録し、振り返ることで主体的に学ぶ力を育むことができた。</li> <li>長期休暇中の提出物状況調査を行い、教員間にて情報共有を図ることで、学校全体で未提出物を減らす取り組みを行った。</li> <li>大学入試改革を考慮し、英語検定の受検を奨励したことで、前年度と比較して多くの生徒が受検した。また、漢字検定や数学検定では、受検者に過去問を配布するなど各学年の目標級の達成や上位級の合格者を増やすための工夫をした。</li> </ul>
今後の課題 と改善策	<ul style="list-style-type: none"> <li>「Classi」の学習記録については、授業や行事、委員会等多岐にわたって活用の幅を広げていくことで、多くの生徒が、「Classi」にログインする習慣を身に付け、「Classi」の利用価値を高めていく。</li> <li>英検については、各学年の目標級を達成できる生徒数を増やしことや、上位級の合格率を高めるため、教科で検討を重ねて改善していく。</li> <li>各検定では、学年の目標級を生徒全員に共有させ、目標級達成や上位級への挑戦の機運を高める声かけを行う。</li> </ul>

3-③	<ul style="list-style-type: none"> <li>・発問、板書、指名など、各教員の指導性が各教科の授業において適切に発揮されているか。</li> </ul>
取組目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・従来型の授業スタイルに固執することなく、生徒主体型授業を導入するなど、より確かな学力が身に付くよう生徒の指導にあたる。</li> <li>・講義中心の授業から、生徒主体の授業への転換を図る。</li> <li>・知識習得中心の授業から、考える授業への転換を図る。</li> </ul>
取組内容 と成果	<ul style="list-style-type: none"> <li>・机の配列の工夫や図書室や情報処理室、マルチメディアラウンジの活用など、授業内容の目的に応じて柔軟な取り組みを行い、生徒の学習への関わりを強化することができた。</li> <li>・電子黒板や教員用及び生徒用タブレットを活用することで、知識習得中心の授業からの脱却を図り、生徒一人ひとりの学習意欲の向上に努めた。</li> <li>・従来の板書による授業やプリント学習に加え、タブレットや電子黒板等のICT機器を活用するなど、わかりやすい授業を目指した。</li> </ul>
今後の課題 と改善策	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学習教材の精選と活用を心がけ、授業の組み立てについて工夫・改善していくことで、生徒の学習意欲の向上や学力の向上に努める。</li> <li>・学習指導要領改訂に伴い、教員の情報活用能力の引き上げと様々な教育活動の場でICT機器を積極的に活用していく。</li> </ul>



3-④	<ul style="list-style-type: none"> <li>・視聴覚教材や教育機器、コンピュータや情報通信ネットワークを効果的に活用した授業が行われているか。</li> </ul>
取組目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・授業、講習等をはじめ、生徒の学び直しや授業の予習・復習、各種検定の対策や大学受験等の学習に、動画コンテンツを幅広く活用していく。</li> <li>・電子黒板やタブレット等のICT機器を、各教員が授業で活用できるようになる。</li> <li>・電子黒板やタブレット等の活用事例とその結果を教科で共有し、効果的な活用を推進する。</li> </ul>
取組内容 と成果	<ul style="list-style-type: none"> <li>・過年度の学び直しや授業の予習・復習としてWEB学習システム「デキタス」、英語検定の対策としてeラーニング教材「英検キャット」、大学受験対策として映像講座「駿台サテネット21」を利用することで、生徒の家庭学習としての利用だけでなく、授業や講習等にも幅広く活用することができた。</li> <li>・マルチメディアラウンジのパソコンを更新するだけでなく、プリンターを設置したことで、授業内で効果的に活用することができた。</li> <li>・教員用タブレットの導入により、電子黒板と併用して利用する場面が多くなった。動画やインターネットを活用した授業が日常的に行われるようになり、ICT機器を使った授業が浸透した。</li> </ul>
今後の課題 と改善策	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教科内でタブレットの実践事例を共有・蓄積していくことで、教職員の活用率を高めていく。</li> <li>・情報機器は、「使用すること」そのものが目的ではなく、使用することにより「授業効果を高めること」が目的であるという視点で、もう一度、使用方法を見直す。</li> </ul>

3-⑤	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学校図書館の計画的利用や、読書活動の推進に取り組んでいるか。</li> </ul>
取組目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・高等部からの入学生に図書室ガイダンスを行う。</li> <li>・授業担当教諭が授業中に生徒に見せる資料を貸し出す。また、校外学習の時間に利用する資料をブックトラックで学年に貸し出す。</li> <li>・読書活動の推進としては、新着本案内の掲示をし、図書室利用を促す。</li> </ul>
取組内容 と成果	<ul style="list-style-type: none"> <li>・入学生に図書室オリエンテーションとガイダンスを行った。</li> <li>・家庭科、理科、美術、学年の校外学習前準備等の授業での利用に対応した。</li> <li>・新着本案内の掲示については、年3回本を購入するたびに、生徒の希望図書や話題本の表紙をコピーし、興味を引くようなものを作った。</li> <li>・朝の読書や受験対策に活用できるよう、新着の図書案内の教室掲示を毎月作成した。</li> <li>・3年生の一部のクラスに、受験用の本を選び、教室へ大量貸出した。</li> <li>・卒業学年から年度末に「後輩に贈る本」と展示用棚を卒業記念品として寄贈され、受入・配架・展示した。</li> </ul>
今後の課題 と改善策	<ul style="list-style-type: none"> <li>・図書室の計画的利用は、学校全体の取り組みとして対応していく。各教科の要望についても今まで以上に連絡を密にしてサービスの質を上げるよう努力する。</li> <li>・高等部は教室と図書室が遠く、なかなか利用機会がないため、新着本案内や朝の読書を利用して、図書室の広報活動をすすめていく。</li> <li>・1年生のオリエンテーション・ガイダンスをすべてのクラスで行い、図書室の存在を高等部から入学した生徒にも印象付けていく。利用者を増やすため、入学時など初期の段階で、図書室の宣伝が行えるよう、学年・担任に協力を仰いでいく。</li> <li>・国語科と協力して、生徒の国語力増進に努める。論理的文章読解などの資料提供をする。</li> </ul>

3-⑥	<ul style="list-style-type: none"> <li>・体験的な学習や問題解決的な学習、生徒の興味・関心を生かした自主的・自発的な学習が適切に行われているか。</li> </ul>
取組目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・様々な体験学習を通して豊かな人間性を育む。</li> <li>・各教科の授業において、従来のような教員の一方的な講義形式の「教わる学習」から、「自ら学ぶ学習」への転換を図る。</li> <li>・各教科の授業では、グループごとに課題に取り組みせたり、討論の場を設け発表させるなどして、生徒が抱いた興味・関心がその後の自主的な学習につながっていくようにする。</li> </ul>
取組内容 と成果	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「宿泊オリエンテーション」や「エンカウンター講座」、「コミュニケーション講座」を通して良好な人間関係を築き、自立心と他者を思いやる心を育むことができた。</li> <li>・理科の日や芸術鑑賞教室では、各学齢に応じた作品に触れることを通して、本物の美しさに感動する心を養うことができた。</li> <li>・精神修養会、立居振舞講座では、自らを見つめ律する道徳観と女性らしい所作を身に付けることができた。</li> <li>・PREPや海外語学研修では、異文化に触れることを通して、異文化社会のなかで求められる判断力や論理的思考の構築、国際社会で通用する実践的語学力の育成、国際舞台で活躍する将来のビジョン形成を養うことができた。</li> <li>・各教科の授業において、グループでの共同学習、討論、発表等をできるだけ多く取り入れるようにし、生徒自身の気づきが学びにつながるような授業を実践した。また、グループ討議などでは、慣れない生徒もいるため配慮することも必要であったが、回数を重ねるにつれ、生徒の学びの姿勢が能動的になったと見受けられる部分はあった。しかし、教科書の内容を終わらせることを考えると、時間が足りない現状が見られた。</li> </ul>
今後の課題 と改善策	<ul style="list-style-type: none"> <li>・今後も生徒自身の気づきによる学びといった基本的な考え方のもと、1つの授業時間のなかで講義、質問、グループ討議といった様々な授業形態を複合させるなどの工夫を行っていく。</li> </ul>

3-⑦	・学校行事、体験活動などが、適切な管理体制の下に実施されているか。
取組目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学校行事の体験や運営を通して、思考力や実践力を身に付け、感動や達成感が味わえるようにはたらきかける。</li> <li>・生徒の安全を第一に考え、起こり得る危険を想定し、対処できる準備を整理しておく。</li> </ul>
取組内容 と成果	<ul style="list-style-type: none"> <li>・みどり祭や卒業生を送る会などの学内行事では、各実行委員が担当教員と連携を図り、リーダーシップをとることで、生徒主体の有志企画が年々充実してきた。自主性や積極性を発揮し、得意分野を様々な形で表現する生徒が増えた。</li> <li>・宿泊等の学外行事では、自然災害時の対応、最寄りの医療機関等を事前に保護者に示し、健康状態の調査を行うなどして、安全を第一に実施することができた。また、行程については、数か月前から業者と打ち合わせを重ね、時間的に余裕を持った見学や体験活動ができるよう計画した。</li> </ul>
今後の課題 と改善策	<ul style="list-style-type: none"> <li>・本校の良さを残しながらも、より生徒主体での行事運営ができるよう、新しいことにも積極的に挑戦していく。</li> <li>・実行委員のみならず、より多くの生徒が積極的に意見を出したり、自発的に参加したりできるよう改善を図る。</li> <li>・学外行事の実施にあたっては、今後も生徒の安全に注意を払い、様々な側面から考え、細かく計画していく。また、状況を判断し臨機応変に対応をしていく。</li> </ul>

3-⑧	<p>・生徒会活動などが、適切な管理体制の下に実施されているか。</p>
取組目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学級委員会では、学校行事の一部を委員会で企画・運営を行う。</li> <li>・保健体育委員会では、体育祭を含む保健体育関係の活動の運営・補佐を行う。</li> <li>・文化委員会では、「学校新聞」の発行を行う。</li> <li>・美化委員会では、校内及び周辺の美化活動を統括する。</li> <li>・ボランティア委員会では、各種募金活動やボランティア活動を統括する。</li> <li>・みどり祭実行委員会では、みどり祭の企画・運営を行う。</li> <li>・合唱コンクール実行委員会では、合唱コンクールの企画・運営を行う。</li> <li>・卒業生を送る会実行委員会では、卒業生を送る会の企画・運営を行う。</li> </ul>
取組内容 と成果	<ul style="list-style-type: none"> <li>・常任委員会（学級委員会、保健体育委員会、文化委員会、美化委員会、ボランティア委員会）の前後期制を継続させ、活動期間を長く設定し、生徒が主体的に活動しやすいようにした。</li> <li>・学級委員会では、4月19日に新入生歓迎会を行い、みどり祭でも実行委員とともに企画・運営を行った。また生徒の発案で、登校時に校門での挨拶活動を始めた。</li> <li>・保健体育委員会では、4月18日の健康診断の準備、片付けを行い、5月16日に体育祭を実施した。また、次年度に向けて体育祭の企画を練った。</li> <li>・文化委員会では、年度末に「学校新聞」を発行した。</li> <li>・美化委員会では、各教室に花を飾るなど、校内の美化に努めた。また、校内外の花壇の整備を行った。</li> <li>・ボランティア委員会では、青少年健全育成推進街頭キャンペーンへの参加、赤い羽根共同募金、緑の募金の校内募金運動への参加、ダルニー奨学金、ecoプロジェクト（使い捨てコンタクトレンズ空ケース回収運動）等、様々な活動に参加した。</li> <li>・各実行委員会では、9月15、16日みどり祭、10月3日合唱コンクール、2月21日卒業生を送る会を実施し、成功させた。</li> <li>・朝や昼休みを使ったランチミーティング形式にすることで活動を継続している。</li> </ul>
今後の課題 と改善策	<ul style="list-style-type: none"> <li>・委員会の運営をさらに効率よく行うため、委員会の連絡事項は、「Classi」等を活用することを検討する。</li> <li>・委員会全体について活動内容を見直し、存廃、新設も含めた再編成を検討する。</li> </ul>

3-⑨	<ul style="list-style-type: none"> <li>・部活動など教育課程外の活動が、適切な管理体制の下に積極的に実施されているか。</li> <li>・部活動が、教職員全体の協力体制の下で実施されているか。</li> </ul>
取組目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・事故防止、事故発生時、事故後についての対策を事前にまとめることにより、まずは事故を未然に防ぐ工夫をし、万が一事故が発生した場合においても速やかに安全対策や応急手当ができる準備を整える。</li> <li>・安全に楽しく活動ができるように、活動時間、活動場所、活動内容を定める。</li> </ul>
取組内容 と成果	<ul style="list-style-type: none"> <li>・校友会各部で作成している「校友会・事故防止のための安全対策」に基づき、安全や事故防止に配慮して活動を行った。</li> <li>・部活動ごとに休養日を設け、学習面との両立を図りながら安全面にも十分に留意して活動を行っており、大きな事故を起こさずに活動することができた。</li> <li>・活動中はできる限り顧問が監督できるよう、特に運動部では、顧問を2名以上配置している。職員会議など職員不在時は、活動内容を工夫し安全性の高いものに調整するか、活動自体を自粛している。</li> <li>・可能な限り活動中に顧問が監督できるようにしているが、会議や校務が重なり、顧問不在の場面も散見された。</li> </ul>
今後の課題 と改善策	<ul style="list-style-type: none"> <li>・施設や備品の不備、破損がないか常にチェックし、二次災害防止の観点も含めて速やかに修理や交換を行う。</li> <li>・顧問不在の場合は、同じ活動場所を使用する別の校友会顧問と協力して対処・連絡が取れるように工夫しているが、さらに、特別講習、学習支援センターによる補習、委員会活動など放課後活動を整理し、担当顧問が直接安全管理できる体制を整備していく。</li> <li>・中・高等部の組織として部活動を教育活動の一環と捉え、学校全体で生徒の実践力・思考力・共生力を育むための協力体制を整えていく。</li> </ul>

3-⑩	<ul style="list-style-type: none"> <li>・個別指導や習熟度に応じた指導、補充的な学習や発展的な学習など、個に応じた指導が適切に行われているか。</li> </ul>
取組目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学習支援センターでは、個々の学力やニーズに合わせた各種コンテンツを実施することで、基礎学力の定着から応用力の育成までを目指す。</li> <li>・各種講習を実施することで、発展的な学習及び補充的な学習の役割を果たす。</li> </ul>
取組内容 と成果	<ul style="list-style-type: none"> <li>・予備校講師による講義のあと、講義内容による演習を行い、指導員が演習の質問や理解の弱い生徒へ対応することで、自身の課題発見やその克服に取り組むことができた。また、「映像授業」や「ロ型演習」等の各プログラムにおいても、組織立てた「学び直し」を同時に進めることができた。</li> <li>・1年生を対象とした特進講習や、2、3年生を対象とした特別講習、長期休暇期間を利用した受験対策夏期講習、受験対策冬期講習を実施することができた。講習については、大学受験を意識した様々なレベルの講座があり、受講を通して、実力を養成することができた。また、河合塾主催の夏期講習についても本校にて実施することができた。</li> </ul>
今後の課題 と改善策	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学習支援センターについては、学習効果や生徒満足度を高めるため、運営を行っている提携予備校とも協議したうえで、内容を充実させていく。</li> </ul>

3-⑪	・チームティーチング指導などにおいて、教員間で適切な役割分担がなされているか。
取組目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・理科の実験・観察においては、安全を第一に教科担当の他に実験助手がつき、チームティーチングで実験・観察指導にあたる。</li> <li>・英会話の授業では、各学年ともネイティブの教員に授業担当者がつき、授業の進度や生徒の理解度に合わせて、授業担当者がフォローに入るようにする。</li> </ul>
取組内容 と成果	<ul style="list-style-type: none"> <li>・理科の実験・観察においては、各班や個々の実験状況に応じて、実験助手がサポートすることにより、生徒が方法や手順を理解しながら時間内に実験を進めることができた。</li> <li>・英会話では、チームティーチングの形態での授業を以前から行っており、授業の進め方などは、英語科のなかで確立されつつあり、学習効果が上がっている。</li> </ul>
今後の課題 と改善策	<ul style="list-style-type: none"> <li>・理科実験、英会話の授業におけるチームティーチングについては、概ね良い成果がでているため、今後も同様の授業形態で行っていく。</li> </ul>



3-⑫	<ul style="list-style-type: none"> <li>・併設校3部の連携・協力のための取組がなされているか。</li> <li>・幼稚部との連携に関する取組がなされているか。</li> <li>・初等部との連携に関する取組がなされているか。</li> <li>・中高連携など学校間の円滑な接続を図るための取組が行われているか。</li> </ul>
取組目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・幼稚部、初等部、中・高等部においては、行事や授業等の機会を通して可能な範囲で連携しつつ教育活動を推進する。</li> <li>・中等部、高等部では、それぞれの発達段階を踏まえ、教科において中等部での学びが高等部につながるように配慮するとともに、校友会活動や各行事においても学年ごとの役割をもたせた上で上級学年につなげる。</li> </ul>
取組内容 と成果	<ul style="list-style-type: none"> <li>・併設校3部では、可能な範囲で連携をとることができた。</li> <li>・幼稚部との連携においては、高等部3年生が教養美術の授業で制作した自主教材を使って、園児に読み聞かせを行った。</li> <li>・初等部との連携においては、入試広報担当者が初等部保護者対象の説明会を実施した。</li> <li>・中高連携では、中等部において、学習習慣の確立と基礎学力の定着を目指し、各学齢に応じた学習の取り組みを行うことにより、高等部の学習にスムーズに移行することができた。また、総合学習「Kamakura Beyond Project」では、高等部2年生から中等部2年生までを縦割りにした起業家教育のなかで、高等部2年生をトップに組織を編制し、学齢（発達段階）に応じた役割分担で活動を行った。その結果、下級生は上級生の活動を間近に見ることで、組織の運営を理解し成長することができた。</li> </ul>
今後の課題 と改善策	<ul style="list-style-type: none"> <li>・初等部との連携を更に深めるため、みどり祭に来校された初等部の保護者に対して、初等部と中・高等部の接続教育について、アピールできる場を設けるように検討していく。</li> </ul>

3-⑬	<ul style="list-style-type: none"> <li>・大学（鎌倉女子大学・鎌倉女子大学大学院・鎌倉女子大学短期大学部）との連携に関する取組がなされているか。</li> </ul>
取組目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教育実習、教職実践演習フィールドワークにおいて大学との連携を図る。</li> <li>・鎌倉女子大学に進学を希望する生徒のための高大連携講座や、進学決定者の申し送りを通して円滑な接続を図る。</li> <li>・みどり祭において大学の学友会と高等部の校友会との連携を図る。</li> </ul>
取組内容 と成果	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教育実習、教職実践演習フィールドワークにおいては、予定どおり連携することができた。</li> <li>・高等部2、3年生を対象に高大連携講座を行うことができた。また、鎌倉女子大学へ進学する生徒に関して、大学の各学部教員に申し送りを行った。</li> <li>・大学のみどり祭においては、マーチングバンド部とフェアリーコンサート部が演奏・演技を披露した他、中・高等部のみどり祭では、フラダンス等幾つかの学友会が演奏・演技を披露し、会場を盛り上げた。</li> </ul>
今後の課題 と改善策	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教育実習における学生の評価については、大学側と情報を共有し、報告をする過程を通して、より連携を図っていく。</li> <li>・高大連携講座は、高等部生徒が大学での授業を受講し、単位取得ができ、大学に進学した場合は、単位認定を受けることができるものであり、併設校のメリットといえるため、本学クラス（鎌倉女子大学進学希望クラス）の生徒には、いっそう目的意識を持たせて、将来につなげられるように指導していく。</li> <li>・みどり祭での交流については、引き続き学友会と調整して継続していく。</li> </ul>

## 4. キャリア教育（進路指導）

4-①	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学校の教職員全体として組織的にキャリア教育（進路指導）に取り組んでいるか。</li> </ul>
取組目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒が様々なことに興味関心を持ち、自らの強みを意識しながら学校生活を送り、自らの進路に対する意識を高めることができる。</li> <li>・予測不可能な時代のなかで、大きな変化のなかでも活躍でき、努力し続けられる、自らの強みを生かした進路選択を行うことができる。</li> <li>・生徒が自ら自己の可能性を拡大していくことを支援をする。</li> </ul>
取組内容 と成果	<ul style="list-style-type: none"> <li>・1年生は、外部講師を招聘して、コミュニケーション講座、エンカウンター講座を実施し、人間関係形成力の育成に役立てた。</li> <li>・希望者による職場体験を実施し、幼稚園、保育園などで意欲的に取り組むことができ、望ましい勤労意識を育成した。</li> <li>・キャリア講演会を実施し、生徒に今後の自分の進路や生き方を考えさせる機会となった。</li> <li>・学校行事、学年・学級活動、進路ガイダンスなどを通じて、生徒が様々なことにチャレンジし、興味関心を広め、そのなかで自らの強みを意識して学校生活を過ごすよう伝えている。そのなかで、自らの強みを意識して進路選択を考える傾向が強まっている。</li> <li>・進路ガイダンスを増やし、高大接続改革を説明し、社会の大きな変化のなかで、具体的な学部・学科選択を行う際に、興味関心を持ち、自らの強みを意識して職業と共に、学ぶ学問を重視して進路選択を行うことを強調した。その結果、安易な選択を行う生徒は減少し、目標を持って進路選択をする生徒が増加している。</li> <li>・キャリア教育を通じて、生徒の大学進学への意識は高まっている。</li> </ul>
今後の課題 と改善策	<ul style="list-style-type: none"> <li>・研究会に参加し、職員研修などを行い、教職員が意識を高め、生徒の学習への働きかけを強め、生徒の学習に向かう姿勢を養う。</li> <li>・現高等部1年生から始まる新テストの導入と、生徒の受験期間の長期化、早期化が想定される中、興味関心を広げ、自らの強みを意識した進路選択までの過程を早めるために工夫が必要である。</li> <li>・予見不可能な大きく変化する社会のなかでも、活躍できる人材になりたいという意志を一人ひとりの生徒に持たせるような指導に取り組む。</li> </ul>

4-②	<ul style="list-style-type: none"> <li>生徒の適切な勤労観・職業観の形成や社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる能力・態度を育成するための体系的・系統的な指導が行われているか。</li> <li>職場体験や就業体験が適切に実施されているか。</li> </ul>
取組目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>生徒が、様々なことにチャレンジし、自らの強みと、その強みを生かした学びを、学校や組織、地域、社会のニーズに対してどのような形で貢献できるか考える機会を持つ。</li> <li>社会で活用する知識やスキルと大学などにおける学びとの関係性や、その土台となる高等学校における学びとの関係性について、生徒が理解できるように指導する。</li> <li>看護体験や就業体験などに参加し、職業との適性や必要とされる知識やスキルを理解する。</li> </ul>
取組内容 と成果	<ul style="list-style-type: none"> <li>文化講演会では、料理プロデューサー、宇宙飛行士、海洋研究開発機構の方の3名の女性が中学・高校時代から現在に至る過程や現在の活動について、「Kamakura Beyond Project」では、卒業生より企業についての講演を聞く機会を持った。生徒に大いに刺激となった。</li> <li>合同説明会、大学訪問などで、実際の大学の学びと社会で活用する知識やスキルの関係性、高等学校の学びがどのように大学の学びの土台になっているかを、実際の大学生の事例を通じて学ぶ機会を設けた。その結果、大学訪問やオープンキャンパスで学生に行動面や思考面の質問をする生徒が増えてきた。</li> <li>将来、資格職を目指す生徒には、特に積極的に職場体験に参加させ、適性を判断したり、高等学校でどのように学んでいくべきか考えた。その結果、職業に対するイメージだけでなく、適性を踏まえて職業選択をしていく生徒が増加してきた。</li> </ul>
今後の課題 と改善策	<ul style="list-style-type: none"> <li>今後も講演会などで生徒が主体的に社会のなかで活躍する自分を考える機会を持ち、生徒の将来へのイメージを広げていく。</li> <li>進路選択の理由が曖昧な生徒は減少しているが、保護者などからの外発的理由付けでの進路選択が増加傾向にあるため、生徒自身が主体的に考えられるよう工夫する。</li> <li>職業に対する価値観が激しく変化する現状を、キャリア教育にどのように反映させていくべきか検討する。</li> </ul>

4-③	<ul style="list-style-type: none"> <li>生徒の能力・適正等の理解のために必要な個人的資料や、進路情報が適切に収集され、活用されているか。</li> </ul>
取組目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>二者面談、三者面談による情報収集と、生徒への助言・指導を行う。</li> <li>進路希望調査を実施し、必要な大学の情報収集を行う。</li> <li>職業体験やインターンシップへの参加による適性の把握を行う。</li> <li>模擬試験による学力情報の収集と学習スキルの把握をし、帳票返却による学習スキルに関するPDCAサイクル指導を行う。</li> </ul>
取組内容 と成果	<ul style="list-style-type: none"> <li>二者面談や三者面談は、志望進路の方向性や志望理由を把握し、生徒自身の情報収集の方法を指導したり、適性を考えたりする機会として活用できた。その結果、生徒は各自で情報収集を行い、次の面談へのつながりが明確となった。</li> <li>キャンパス訪問時に授業体験や活動体験をすることで、志望進路に対する適性を考え、生徒自身の学びを振り返る契機となった。ただし、適性を考える機会は、自己の可能性を広げる機会であると捉えるような指導も並行して行った。</li> <li>進路希望調査の記入に必要な大学の情報を収集することを通じて、生徒の情報収集力と情報活用力が向上した。また、担任や進路指導部が、生徒の収集した情報の偏りを見ることで、進路学習方法の傾向を把握し、情報の再収集の指導を行うことができた。</li> <li>職業体験やインターンシップに参加し、振り返りの実習ノートを記入させた。その結果、安易な進路選択は減少し、生徒自身が志望進路の適性や必要な学びを考える契機となった。また、教員が実習ノートを見ることで、生徒の適性に関する偏りや必要な学びを指導することができた。</li> <li>二者面談、三者面談や模擬試験の帳票返却の際に、学習に関するPDCAサイクルを考えさせることで、生徒も教員も学習方法の偏りや、不足している学習スキルを把握することができた。その結果、目標校を目指す上での学習内容の偏りや学習方法の偏りを修正し、不足している学習スキルや学習内容を指導することができた。また、これにより、PDCAサイクルの見直しをできる生徒と、できない生徒との間には、成績との相関があることがわかった。</li> </ul>
今後の課題 と改善策	<ul style="list-style-type: none"> <li>PDCAサイクルの見直しについて、全教員が意識を高め、全生徒が適切な振り返りを行えるようにする。</li> <li>模擬試験に対する意識を全教員、全生徒で高め、生徒の学力がさらに向上するように、成績資料が活用できるように改善する。</li> </ul>

4-④	・進路相談（キャリア・カウンセリング）が適切に実施されているか。
取組目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・二者面談、三者面談などを利用して、進路学習意識の向上と、文理選択や進路の方向性の検討への助言を行い、本人の決定を促す。</li> <li>・二者面談や三者面談などを通し、模擬試験の帳票などの学習情報を利用して学部・学科選択や志望校選択に関する助言を行い、本人と家族での決定を促す。</li> <li>・放課後に進路指導部の担当者による、キャリア・カウンセリングを実施し、担任や学年と情報を共有する。</li> </ul>
取組内容 と成果	<ul style="list-style-type: none"> <li>・進路ガイダンスで伝えた、進路学習の必要性や具体的学習内容を踏まえ、二者面談では、個に応じた進路学習方法を生徒と共に考え、生徒本人に文理選択や進路の方向性を決断させた。その結果、大学訪問やオープンキャンパス訪問時、大学のホームページなどの情報誌利用時に、進路学習の内容を踏まえた情報収集ができるようになってきた。</li> <li>・模擬試験の帳票や大学検索ソフトを利用して、科目の適性或志望者順位などを考慮した学部・学科選択、志望校選択に関する情報を提供し、保護者や生徒自身が学部・学科や志望校を決定し、自己決定意識の高い進路選択を行うことができるよう促した。</li> <li>・放課後等に行った進路指導部の担当者によるキャリア・カウンセリングでは、入試状況や将来のキャリアデザインを踏まえた入試相談や、生徒の適性を踏まえたキャリア構築の相談を受けた。その結果、学部・学科選択、大学選択に生徒の主体性が芽生え、自らのキャリアデザインを意識した学部・学科、受験校選択を行う生徒が更に増えた。</li> <li>・二者面談・三者面談などを通じて、模擬試験の帳票など客観的データに基づいた学習アドバイスを行った。</li> </ul>
今後の課題 と改善策	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ベネッセや河合塾による進路研究会や教員の学年での進路検討会などを実施し、担任が生徒により良いアドバイスができるようしていく。</li> <li>・二者面談において提示する進路学習の方法について、研究会等で得られた情報の学年団への提供方法を更に検討していく。</li> <li>・生徒が進路の方向性、文理選択、学部・学科選択、大学選択などを自己決定するための情報提供を更に充実させる。</li> <li>・進路指導部と担任、学年、教科担当で生徒の進路の状況を把握し、支援できるシステムを構築する。</li> </ul>

4-⑤	・キャリア教育（進路指導）のための施設設備が整備されているか。
取組目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・キャリア学習に関する相談について進路相談室を利用して行う。</li> <li>・高等部校舎の1年生から3年生までのフロアに掲示板を設置し、大学の公開講座やオープンキャンパス、入試情報分析会のお知らせなどを掲示する。</li> <li>・自習室に入試に関する問題集や各大学の赤本などを配架し、受験準備のサポートを行う。</li> </ul>
取組内容 と成果	<ul style="list-style-type: none"> <li>・具体的な進学先に関する相談など、模擬試験の結果や大学に関する各種情報が必要な相談を行う際には、プライバシーに配慮して進路相談室を利用し、充実した情報提供を行った。その結果、具体的な情報を獲得し、受験準備に取り組む生徒が増えた。</li> <li>・進路相談室を生徒が利用したい時に、教員に声をかければ利用できるようにした。</li> <li>・掲示板による講座情報や入試情報を提供することで、大学に関する情報収集の機会を増やすことができた。また、低学年であっても、早い段階から個別に大学訪問を行ったり、入試情報に触れることで、1年次の段階からオープンキャンパスに積極的に参加する生徒が増えているなど、進学に関する意識を高めることができた。</li> </ul>
今後の課題 と改善策	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒の状況に応じて、各掲示板に掲載する内容を更に厳選し、大学に対する興味を持って進路学習ができるようにしていく。</li> <li>・自習室の配架本を更に充実させる。また、受験準備に対してより意識が高まるよう過去問を生徒の視界に入る場所に配架する。</li> </ul>

## 5. 生徒指導

5-①	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学校の教職員全体で生徒の状況についての理解を共有し、生徒指導に取り組む体制が整備されているか。</li> </ul>
取組目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒指導計画に基づいた生徒指導を行う。</li> <li>・職員会議において各学年の生徒状況を報告し、生徒の状況について共有する。</li> <li>・生徒指導事案の共有について、情報クラウド（Classi）を有効利用する。</li> <li>・生徒指導関連の連絡・共有事項を情報クラウド（Classi）を用いて、即時的に伝達し、各学年で対応がしやすいようにする。</li> </ul>
取組内容 と成果	<ul style="list-style-type: none"> <li>・『生徒指導ハンドブック』に「生徒指導計画」を掲載し、年度最初の職員会議において指導指針として提示し、指導に一貫性を持たせた。</li> <li>・職員会議において、生徒の状況について学年ごとに報告した。その結果、全教職員が共通認識のもと、生徒を指導・支援することができた。</li> <li>・特別指導案件データベースを用いて、細かな指導案件も教職員内であれば、いつでも開示できる状態になっている。</li> <li>・「Classi」の「生徒カルテ」機能を利用して、生徒指導情報を即時的に共有することができた。</li> <li>・「Classi」の「グループ」機能を利用して、生徒指導関連の連絡・共有事項を即時的かつ効率的に伝達することができた。</li> </ul>
今後の課題 と改善策	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「Classi」の導入により、生徒情報の共有が容易になった。今後は、情報の記録の責任者を明確にするとともに、「Classi」上にすべての情報が記録されるようにしていく。</li> <li>・特別指導案件は、生徒指導部で確実にデータベース化しているので、これを「Classi」の「生徒カルテ」に必ず記録するようにする。また、生徒指導上参考になる事項を学級担任等生徒に直接関わる教職員が確実に記録するように徹底していく。</li> </ul>



5-②	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒指導のための教育相談が計画的に行われているか。</li> <li>・スクールカウンセラー等との連携が効果的になされているか。</li> </ul>
取組目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒一人ひとりの生活状況や心身の状態に関する情報を共有し、生徒の変化に迅速に対応する。</li> <li>・教員、保健室、スクールカウンセラーが相互に定期的な報告、連絡、相談を行うことで、学年単位、学校単位で生徒の心のケアを行う体制を整える。</li> <li>・生徒及び教員が教育相談室を利用しやすい雰囲気づくりを進め、学級・学年の生徒指導に活用できる環境を整える。</li> </ul>
取組内容 と成果	<ul style="list-style-type: none"> <li>・月に1回、定期的にスクールカウンセラー、養護教諭、学年主任などが集まって各学年の生徒の情報を共有し、注意深く生徒の様子を見守ることができた。</li> <li>・スクールカウンセラー、養護教諭、学年主任などそれぞれの立場から生徒の情報を集約することによって、様々な角度から一人ひとりの生徒の状況を把握することができ、生徒指導の場面において適切かつ迅速な対応に役立てることができた。</li> <li>・学年内の連携や学年と保健室との連携により、スクールカウンセラーが対応しなければならぬ事案に発展する前に適切な対処ができた。</li> <li>・生徒への対応や情報共有については、スーパーバイザーの協力も大きな効果を発揮した。</li> <li>・スクールカウンセラーや保健室からの共有の必要がある情報が、担当教諭や学年主任までに留まり、他の教員が十分状況を把握できていないケースが一部見られた。</li> <li>・新入生の全員面談を行い、全生徒が一度はスクールカウンセラーと話す機会を設けることによって、教育相談室をより利用しやすい雰囲気になってきた。</li> </ul>
今後の課題 と改善策	<ul style="list-style-type: none"> <li>・スクールカウンセラーや保健室からの共有の必要がある情報については、授業や部活動などで気になった場面と合わせて、より多角的に情報集約ができる環境づくりを進めていく。</li> <li>・教育相談室については、今後もだれもが気軽に利用できる場所としてその役割を定着させていく。</li> <li>・スクールカウンセラーの守秘義務もあり、学年で上がった事案について、他の教員に対してどの程度まで情報共有を行っていくか検討していく。</li> </ul>

5-③	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒の問題行動の状況を共有し、適切に対処できているか。</li> </ul>
取組目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「問題行動対応指針」に則り、問題行動に対する指導方法を平準化する。</li> <li>・各学年の特別指導等についての記録は、パソコンで一元的に管理する。</li> <li>・問題行動が発生した背景について十分考慮し、特別指導を行う。</li> <li>・重大な問題行動が起こったとき、教職員間での速やかな情報共有を行う。</li> <li>・学年・生徒指導部・管理職での情報の伝達を円滑に行い、最善の対処を行う。</li> </ul>
取組内容 と成果	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「問題行動対応指針」に則り、教員間での指導を平準化することができた。</li> <li>・問題行動のあった生徒が生徒指導部に提出した「反省文」の内容を必要に応じて管理職と情報共有し、効果的に指導を行うために役立っている。</li> <li>・特別指導案件をパソコン上で一元管理することで、問題行動の傾向を把握することができている。</li> <li>・重大な問題行動が起きた場合に、内容に応じて学年会議、分掌会議、臨時職員会議を開催する準備があり、生徒指導部と連携をとって適切な対応ができている。</li> <li>・問題行動の内容によって、学年処理案件と生徒指導部案件とに分け、適切な対応ができるようにした。重大案件については、学年から生徒指導部を経て管理職へと即時的に報告し、対応することができた。</li> </ul>
今後の課題 と改善策	<ul style="list-style-type: none"> <li>・大きな問題行動の件数が少なく、現状は十分な対応と情報共有ができている。</li> <li>・SNS上のトラブルや家庭内トラブルなどの学校外で起こる問題行動は、顕在化しておらず、把握が難しいが、生徒へのSNSに関する指導等を行うとともに、教職員が様々な新しい問題に対応できるように常に研究・研修を重ねていく。</li> </ul>

5-④	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自ら考え、自主的・自律的に行動でき、自らの言動に責任を負うことができる生徒を育成するための指導を行っているか。</li> <li>・相手の人格を尊重し、豊かな人間関係を構築できる生徒を育成するための指導を行っているか。</li> <li>・社会の一員としての意識（公平、公正、勤労、奉仕、公共心、公德心や情報モラルなど）を身に付けた生徒を育成するための指導を行っているか。</li> </ul>
取組目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒が自発的に考え、行動する機会を増やし、思考力や実践力を高める。</li> <li>・グループ活動等の体験的な学びと教員からの指導を交えて、奉仕の精神や公德心などを養い、互いを認め合い、高め合う雰囲気を構築する。</li> </ul>
取組内容 と成果	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ICT機器を活用するなどして、アクティブラーニングを取り入れた授業が増えた。特に英語科では、トータルテキストトレーニング（TTT）の授業研修のなかで、実践的な英語力が身に付くように工夫した。</li> <li>・体育祭では、保健体育委員や各部活動が企画・運営の中心となり活躍した。また、みどり祭や卒業生を送る会などの行事においても、生徒が主体的・自主的に活動する習慣を身に付け、意欲的に活動した。</li> <li>・「エンカウンター講座」や「ピア・サポート講習会」等を通して、コミュニケーション能力を高めることにより、豊かな人間関係を構築できる生徒を育成することができた。</li> <li>・「Kamakura Beyond Project」を通じて、それぞれの生徒が自分の役割を自覚し、責任のある行動をとること意識した。</li> <li>・情報モラルに関しては、全学年で携帯電話キャリア会社から講師を招き、情報モラルの講座を開いた。</li> </ul>
今後の課題 と改善策	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒の自主性・主体性は、特別活動や行事のなかで発揮されやすい。その一方で、授業でも生徒の自主的・主体的活動を増やすような授業展開ができるように教員各々が工夫していく。</li> <li>・取り組み内容に単発的なものが多い傾向があるように思われる。「Kamakura Beyond Project」や特別活動を通じて、継続的な取り組みを検討する。</li> <li>・情報モラルの講座は、非常に効果的で、今後も継続的に利用していく。</li> </ul>

## 6. 保健管理

6-①	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 法定の学校保健計画が作成され、適切に実施されているか。</li> <li>・ 生徒の保健管理（薬物乱用防止、心のケア等を含む）、保健指導・保健相談が適切に実施されているか。</li> <li>・ 日常の健康観察や、疾病予防、生徒の自己健康管理能力向上のための取組、健康診断が適切に実施されているか。</li> </ul>
取組目標	<p>【高等部】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 学校保健計画を作成し、適切に実施する。</li> <li>・ 生徒の保健管理（薬物乱用防止、心のケア等を含む）、保健指導・保健相談を適切に実施する。</li> <li>・ 日常の健康観察や、疾病予防、生徒の自己健康管理能力向上のための取り組み、健康診断を適切に実施する。</li> </ul> <p>【保健センター】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 学校保健計画を教職員で共有し、適切に実施する。</li> <li>・ 生徒の保健管理、保健指導、保健相談は、対象に合わせた内容で、年間を通じて実施する。</li> <li>・ 生徒が「予防の意識」を持って行動できることを目標に、全体に対して指導を行う。</li> <li>・ 生徒が、普段から自身の健康管理に取り組む姿勢を持つことができるように、保健指導を実施する。</li> <li>・ 健康の保持増進を目的に、健康診断の実施に取り組み、保健管理に努める。</li> </ul>
取組内容 と成果	<p>【高等部】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 保健室と各教科指導の連携により、学校保健計画を速やかに作成し、計画に沿った保健指導を実施することができた。</li> <li>・ 職員室、保健室、教育相談室を中心に、保護者とも連携を取りながら保健指導、保健相談を行うことができた。</li> <li>・ クラス担任、学年主任、教科担当者と保健室が連携して日常の健康観察や心のケアを行った。</li> <li>・ 年2回の体位測定を始め、年初の健康診断など、適切に実施することができた。</li> </ul> <p>【保健センター】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 生徒の実態に基づいた学校保健計画を策定し、実施した。</li> <li>・ 保健講話や部活動への講話などを通して、保健指導を実施した。</li> <li>・ 保護者面談の機会を利用し、健康診断の結果を共有し、保健管理に努めた。</li> <li>・ 提出期限を設ける等、受診勧告書の様式変更を行い、受診率を高めた。</li> <li>・ 受診勧告者へ個別指導を重ねて実施し、前年度に比べ受診率は8.5%向上した。</li> <li>・ 教職員対象に、アレルギー対応のエピペン研修会を実施することにより、生徒が安全、安心な学校生活を送れる体制づくりに取り組んだ。</li> </ul>
今後の課題 と改善策	<p>【高等部】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 各教科による保健指導は、教科の単元に応じた内容が中心となるため、各教科の横のつながりを更に深める。</li> <li>・ 担任が放課後や休み時間等、生徒と関わる時間とすることができる時間を十分に取れるよう、業務体系の抜本的な改革に向けて検討する機会を作っていく。</li> </ul>

	<p><b>【保健センター】</b></p> <ul style="list-style-type: none"><li>・学校保健計画について、各分掌との連携を行い、高等部全体としての取り組みにつなげる。</li><li>・生徒の健康情報について、面談を通して本人や保護者に対して必要な指導や働きかけを随時行う。</li><li>・保健講話は、事前に生徒へのアンケートを実施し、生徒の実態を反映したものにする。</li><li>・健康診断の事後措置への取り組みを強化し、受診率10%増加を目指す。</li><li>・確実な麻しん、風しん予防接種歴の把握に努めるとともに、未接種者に対しての指導を行い、各学年における接種率を100%に近づける。</li><li>・職員対象の救命講習を毎年実施し、生徒がより安全、安心して学校生活を送ることができるよう、緊急時対応を強化する。</li></ul>
--	---

## 7. 安全管理

7-①	<ul style="list-style-type: none"> <li>・法定の学校安全計画が作成され、適切に実施されているか。</li> <li>・学校事故や不審者の侵入等の緊急事態発生時に適切に対応できるよう、危機管理マニュアル等が作成され、活用されているか。</li> <li>・校舎や通学路等の安全点検や教職員・生徒の安全対応能力の向上を図るための取組が定期的に行われているか。</li> </ul>
取組目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学校安全計画を作成し、適切に実施する。</li> <li>・学校事故や不審者の侵入等、緊急事態発生時に適切な対応ができるよう、危機管理マニュアルを作成し、活用する。</li> <li>・校舎や通学路等の安全点検や教職員・生徒の安全対応能力の向上を図るための取り組みを定期的に行う。</li> </ul>
取組内容 と成果	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学校安全計画を作成し、それに則って教育活動を行うことができた。</li> <li>・「防災・防犯マニュアル」を作成し、全校生徒に配付し、防災教育及び防犯教育に活用した。</li> <li>・部活動ごとの活動の特性にかんがみて「各部事故防止対策」を作成し、それに則った活動を行った。重大な事故があったが、顧問をはじめとした職員室教員、保健センターは、十分な対応をとり、事後の生徒のメンタルケアについても相談室の協力を得て、対応することができた。</li> <li>・校舎の安全点検に関してこれまでの方法を見直し、学期ごとに一斉に定期点検を行うようにした。組織的に実施することで校内の不良個所について把握し、施設管理課とも共有し、必要な個所について対応してもらえることができた。</li> <li>・通学路の安全点検については、不審者情報等に基づき適宜見回りを行った。</li> </ul>
今後の課題 と改善策	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「防災・防犯マニュアル」について、初版から6年が経過し、内容について再検討・改訂が必要である。特に大地震の可能性が徐々に高まっているなかで、生徒を保護者に引き渡す方法について、規定をもう少し細かく定めることを検討する。</li> </ul>

7-②	・学校防災計画等が作成され、適切に実施されているか。
取組目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・防火・防災計画を整備した上で、有事における安全確保のための基本行動を周知させる。</li> <li>・各家庭にも災害時における基本行動の徹底を図る。</li> </ul>
取組内容 と成果	<ul style="list-style-type: none"> <li>・岩瀬キャンパス全体の防災訓練を2回、防災訓練内で消火器取扱い訓練と屋内消火栓取扱い訓練を各1回行った。また、教職員対象の救命救急講座を1回実施した。</li> <li>・中・高等部独自の「防災・防犯マニュアル」を発行することにより、生徒だけではなく保護者に対しても、防災に関する心構えや基本行動の周知を行うことができた。</li> <li>・防災訓練後の備蓄食糧食事体験等を通して、生徒の災害時の食事に対する意識を高めた。</li> </ul>
今後の課題 と改善策	<ul style="list-style-type: none"> <li>・様々な場面を想定し、併設校各部、総務部、管轄消防署と相談を行いながら、生徒や保護者も含めた有事に対応できるような訓練を今後も継続していく。</li> <li>・岩瀬キャンパス全体の防災訓練を、これまで2回とも消防署立会いのもとで行ってきたが、消防署からの勧めがあり、2019（平成31）年度からは、2回のうち1回を消防署の立会いのない自主訓練の形式で行う予定である。</li> <li>・特定防火対象物のなかでも大規模建物に該当する岩瀬キャンパスにおいて、幼稚部、初等部と連携した安全行動や災害時用備蓄品の管理等を引き続き行っていく。</li> </ul>

## 8. 組織運営

8-①	<ul style="list-style-type: none"> <li>・校長など管理職は、適切にリーダーシップを発揮し、他の教職員から信頼を得ているか。</li> </ul>
取組目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教職員との対話を重視し、意思の疎通を心がける。</li> <li>・教職員の意見や相談には、真摯に応え、良好な職場環境を心がける。</li> <li>・教育活動や校務運営などすべてにおいて、管理職から適切に助言する。</li> <li>・学校運営の方向性を示し、策定した教育ビジョンの実施に取り組む。</li> </ul>
取組内容 と成果	<ul style="list-style-type: none"> <li>・管理職は、全教職員との面談を実施したり、学年・分掌主任などとの話し合いをしたりすることで、意思疎通が図られ、信頼関係が構築されている。</li> <li>・学校運営全般において、管理職の適切なリーダーシップにより、教職員の一体感が保たれている。</li> <li>・管理職は、多くの教職員から種々の相談を受け、またそれに真摯に応えることで、教職員との信頼関係を維持・発展させることができた。</li> <li>・学校案内にも明記された「目指す学校像」の目標に向け、教職員への周知と実践に取り組んだ。その結果、授業や行事など教育活動全般において、生徒が自ら進んで活動する場面が数多く見られるようになった。</li> </ul>
今後の課題 と改善策	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教職員と管理職の信頼関係は、十分に築かれており、今後も継続に努める。</li> <li>・部長、次長のリーダーシップのもと、教職員一人ひとりが学校経営に携わっていることを自覚するよう、いっそうの意識改革を進める。</li> <li>・策定した教育ビジョンの完成には、時間が必要なため、今後も継続していく。</li> </ul>



8-②	<ul style="list-style-type: none"> <li>・校務分掌や主任制が適切に機能するなど、組織的な運営・責任体制が整備されているか。</li> </ul>
取組目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・すべての教員が各校務分掌のいずれかに所属し、組織的な学校運営を行う。</li> <li>・各主任は、校務が確実に遂行されているかを適宜チェックする。</li> <li>・前例踏襲を見直し、現状に即したより良い学校運営を目指す。</li> <li>・管理職との連携を密にし、的確さを欠くことのないように配慮する。</li> </ul>
取組内容 と成果	<ul style="list-style-type: none"> <li>・各分掌内組織で位置づけられた役割を責任を持って取り組むことで、すべての教員各自が学校運営への参画意識を強く持つようになった。</li> <li>・組織的な校務運営の形態が定着し、各分掌主任は、分掌担当者への調整や助言を行った。その結果、ほぼすべての校務内容を的確に遂行することができた。</li> <li>・長年の仕事をそのまま踏襲する傾向に対しては、管理職からの指示により改善を促し、その成果があらわれてきた。</li> </ul>
今後の課題 と改善策	<ul style="list-style-type: none"> <li>・従来から継続されている校務の内容や方法の見直しにより、現状に即した内容に改善が図られた。さらに良い教育現場を目指し工夫を重ねる。</li> <li>・組織としての機能を果たしているが、教職員の意識には多少の温度差がうかがえる。分掌主任による指揮を高め、仕事内容の質的向上に努める。</li> <li>・管理職への報告・連絡・相談が頻繁に行われているため、学校運営の方向性は一致していると考えられる。さらに個々の教員の資質向上を図り、学校の運営を確固たるものとする。</li> </ul>

8-③	・職員会議等が学校運営において有効に機能しているか。
取組目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・運営会議、職員会議のほか、分掌会議、学年会議を定例化し、校務の内容や現状などを共有する。</li> <li>・運営会議での合意を踏まえ、職員会議での指示・伝達を行い、教育現場での実施などを確実に行う。</li> </ul>
取組内容 と成果	<ul style="list-style-type: none"> <li>・行事予定に学年会議、分掌会議を位置づけているため、会議の定例化が定着し、組織が機能している。</li> <li>・運営会議、職員会議については、必要な時間を確保し、教職員への意思疎通を図った。</li> <li>・会議資料を事前に「Classi」にあげ、いつでも見られるようにした結果、会議内容の周知ができ、円滑な議事進行ができたため、会議時間を縮小することができた。</li> </ul>
今後の課題 と改善策	<ul style="list-style-type: none"> <li>・より良い学校づくりに向け、すべての教員の足並みが揃うよう、組織の一員としての自覚を促し、一致団結した取り組みを行う。</li> <li>・会議の内容を事前に周知することが有効であったため、今後も同様に進める。</li> <li>・学年会議、職員会議等において、教職員全体で共有した情報は、生徒指導等の教育活動に活かされており、今後も情報共有を続けるよう努める。</li> </ul>

8-④	<ul style="list-style-type: none"> <li>・各種文書や個人情報等の学校が保有する情報が適切に管理され、また、情報の取扱方針が教職員に周知されているか。</li> </ul>
取組目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・職員の守秘義務の徹底を図る。</li> <li>・個人情報に関するすべての事柄の取り扱いは、慎重かつ適正に扱う。</li> </ul>
取組内容 と成果	<ul style="list-style-type: none"> <li>・個人所有の情報機器の使用及び、デジタルデータの持ち出しを禁止し、情報の漏洩を防いだ。また、成績処理を持ち帰らずに行うことを励行した。</li> <li>・生徒の氏名、住所、成績等一切の個人情報は、教務部で一元管理されている。</li> <li>・年度末に、教育活動で使用した卒業生の生徒カードなど、保存期間のある文書を除いて廃棄した。</li> </ul>
今後の課題 と改善策	<ul style="list-style-type: none"> <li>・今後も引き続き、個人情報管理の徹底に努める。</li> </ul>

## 9. 研修（資質向上の取組）

9-①	<ul style="list-style-type: none"> <li>・授業研究を全教員が行うことや、授業研究を継続的に実施することなどを通じ、授業改善に全校的に取り組んでいるか。</li> </ul>
取組目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教員相互の授業を参観し、互いの授業について検討し、授業改善を図る。</li> <li>・授業形態について、従来の一方的な「講義形式」から「自ら主体的に学ぶ学習」へと転換を図る。</li> <li>・生徒が「確かな学力」を身に付けられる授業の実践を図る。</li> </ul>
取組内容 と成果	<ul style="list-style-type: none"> <li>・6月と11月に行っている授業研究週間では、中・高等部の教員同士だけでなく、初等部の教員にも授業を公開し、意見交換を行った。</li> <li>・アクティブラーニングなどによる、生徒の主体性を重視した授業が徐々に広がり始め、授業中の生徒の発言が多くなるなど成果が表れるようになった。</li> <li>・大学入試問題の解法などを取り入れた授業により、生徒の学力向上のための授業改善に取り組んでいるが、すぐには成果が表れていない。</li> </ul>
今後の課題 と改善策	<ul style="list-style-type: none"> <li>・各教科ともグループワークやペアワークを取り入れたり、討論・発表の場を設ける等して生徒の主体的な学びを促す授業を実践していく。同時に、受験学力を付けることを意識し、教科書の内容を早めに終わらせるよう、バランスをとることを心がける。</li> <li>・生徒の学力向上のために、授業研究、教材研究、専門分野の研究、入試問題研究を通して、教員自身の授業力の向上を図っていく。</li> </ul>

9-②	<ul style="list-style-type: none"> <li>・校内研修の課題が適切に設定され、実施されているか。</li> <li>・教職員が積極的に校内研修・校外研修に参加しているか。</li> </ul>
取組目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教員の資質向上や授業改善を中心に校内研修を実施する。</li> <li>・自身のスキルアップのため、積極的に校外の研修に参加する。</li> </ul>
取組内容 と成果	<ul style="list-style-type: none"> <li>・校内研修を各学期1回、合計年3回実施した。</li> <li>・校内研修では、生徒とのコミュニケーションを図るためのスキルアップなど現場で役立つ内容が2回、教員の振る舞いや仕事の改善についての内容が1回行われた。特にコミュニケーションスキル研修の内容は、すぐに実践に結び付いた。</li> <li>・外部の研修参加は、教科や教員により参加の程度が異なっている。研修内容も教科指導以外に、生徒指導、ICT関係、生徒募集など多岐に及んでいるが、いずれもこれからの学校運営や改革に関わる有意義な研修会であった。</li> </ul>
今後の課題 と改善策	<ul style="list-style-type: none"> <li>・校内研修の日程を工夫し、参加できない教員をなくす。</li> <li>・研修については、参加した教員のスキルアップにとどまらず、授業や生徒指導、校務運営に還元できるようにする。</li> <li>・教員により校外研修の参加意識が異なっていることを改善する。</li> </ul>

9-③	<ul style="list-style-type: none"> <li>・校長等の管理職が定期的に授業観察を行い、教員に対して適切な指導・助言をしているか。</li> <li>・教員の指導の状況を的確に把握するとともに、指導が不適切な教員への対応が適切になされているか。</li> </ul>
取組目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・授業参観（学校開放デー）、授業公開週間だけでなく、平素の授業においても部長、次長、スーパーバイザー、教科主任が授業観察を行い適切な指導にあたる。</li> <li>・授業観察で把握できた教員の不適切な指導については、スーパーバイザー、教科主任が担当教員に助言する他、改善がなされるまで次長、部長が指導にあたる。</li> </ul>
取組内容 と成果	<ul style="list-style-type: none"> <li>・授業観察については、スーパーバイザーを中心に行われ、担当教員に、指導上の留意点・改善点が詳細に伝えられた。その後改善されているか否かの確認を部長、次長が行った。</li> <li>・指導が不適切であると指摘された教員の授業内容や方法は、部長、次長等が助言・指導を行い、かなり改善された。また、併せて授業アンケートが実施されたことによって、授業内容の向上に効果的に働いた。</li> <li>・ホームルームでの生徒指導については、単独ではなく複数の職員で、生徒に寄り添った指導を行うよう助言した。</li> </ul>
今後の課題 と改善策	<ul style="list-style-type: none"> <li>・授業観察については、今後も継続して行い、教員の指導力向上を図る。</li> <li>・スーパーバイザーを中心に行われた授業観察を踏まえ、今後は部長等の管理職によって授業観察を行い、指導にあたる。</li> <li>・教科指導に問題が見受けられた教員に対しては、研修への参加などにより質の高い授業ができるよう改善指導を行う。</li> <li>・生徒指導に問題が見受けられた教員に対しては、部長、次長が中心となり助言指導を行う。</li> </ul>

## 10. 保護者・地域社会等との連携

10-①	<ul style="list-style-type: none"> <li>・保護者が学校運営に参画し、協力できる体制を整えているか。</li> <li>・教育ボランティアを集めるシステムができているか。</li> </ul>
取組目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・保護者が行事等を通じて、学校運営に協力できる体制を整える。</li> <li>・必要に応じて外部の教育ボランティアや専門家の協力を得られる体制作りを検討し、その基礎を構築する。</li> </ul>
取組内容 と成果	<ul style="list-style-type: none"> <li>・みどり祭の保護者企画は、前年度に引き続き保護者の自主的な活動が見られ、大変有意義なものとなった。</li> <li>・総合的な学習の時間の「Kamakura Beyond Project」では、外部のボランティアや専門家の講話、指導を導入し、企画の体制作りの検討やみどり祭への事前準備に向けて進展が見られた</li> </ul>
今後の課題 と改善策	<ul style="list-style-type: none"> <li>・みどり祭の保護者企画は、今後も継続的に行うことで、保護者との連携を密にし、学校と保護者の協力体制を作る場として今後も有効に活用する。</li> <li>・今後も外部のボランティアや専門家を活用し、次の発展につなげていくために、更なる検討や準備を行っていく。</li> </ul>

10-②	・学校公開を定期的実施しているか。
取組目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・授業参観（学校開放デー）や体育祭等の行事を通して、学校公開を定期的に行う。</li> <li>・保護者講座や保護者対象の立居振舞講座等を通して学校と保護者との連携を図る。</li> </ul>
取組内容 と成果	<ul style="list-style-type: none"> <li>・授業参観（学校開放デー）では、実施にあたって、多くの保護者に学校を公開するために、曜日の設定や授業を自由に参観できるように工夫した。</li> <li>・体育祭では、保護者参加種目を設定することで、共に活動する場を設けた。</li> <li>・保護者講座も、保護者と教員が知識を広げつつ、楽しみながら実施できるよう内容を工夫し、円滑な交流の場として機能した。</li> </ul>
今後の課題 と改善策	<ul style="list-style-type: none"> <li>・授業参観（学校開放デー）については、学年が上がっても、参加人数が減少しないように、今後も実際の生徒の学習の様子を見てもらう体制を作っていく。</li> <li>・保護者講座においては、よりニーズの高いものに特化し活性化していく。</li> <li>・次年度も学校開放デーを設けるなど広く公開する体制を継続していく。</li> </ul>



10-③	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒・保護者の学校への満足度や要望を把握するための取組を行っているか。</li> <li>・教育相談体制を整備し、生徒・保護者から寄せられた具体的な意見や要望に、適切に対応しているか。</li> </ul>
取組目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒・保護者のニーズを聞き取り、現状把握を行い、内容を精査し反映させる。</li> <li>・学校生活における生徒の様子や現状を、教員と保護者が共有できる場としての保護者会や保護者懇談会を実施する。</li> <li>・三者面談を通じて、直接担任と生徒、保護者が話し合うことで、生徒の抱える問題や保護者の不安に迅速に対応する。</li> </ul>
取組内容 と成果	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学期ごとに授業に関するアンケートを実施し、アンケート結果を踏まえ、授業の見直しや、スーパーバイザーと協力した授業改善に取り組むことができた。</li> <li>・学校生活に関するアンケートを実施したことで、表面化されていないクラス内の傾向を知ることができ、学級担任のクラス運営に役立てることができた。また、いじめの原因となり得る事象の発見や、学級の生徒の思いに気づきやすくなった。</li> <li>・例年、6学年合同の保護者懇談会を実施していたが、議題事項が学年により異なるため、学年ごとに分けて中等部・高等部1年生、2年生、3年生に分けて懇談会を実施した。</li> <li>・学級保護者会は、複数の保護者が一堂に会し、直接話をすることができ、家庭間の情報共有がよりスムーズにできている。必要に応じて、学年保護者会を実施することで学年ごとの話題を共有することができた。</li> <li>・三者面談は、限られた時間内で行われるため、すべての相談ができるわけではない。そのため、必要に応じ、別の日に担任以外にも学年主任、スーパーバイザー、スクールカウンセラーを交えて面談を実施するケースもあった。</li> </ul>
今後の課題 と改善策	<ul style="list-style-type: none"> <li>・授業に関するアンケートの質問内容を精査し、より学力向上やアクティブラーニングにつながる生徒の意見を聞き取り、これまで以上に生徒が主体となり、双方向性と活気のある授業展開の構築を行っていく。</li> <li>・学校生活に関するアンケートについては、項目数の多さ、生徒の回答慣れ等を考慮し、効果的な質問に絞り、簡潔化していく。</li> <li>・学年ごとの懇談会は、議題事項が発達段階に応じたため、保護者が興味・関心を持ち懇談会に参加していた。</li> <li>・保護者懇談会は、学年があがると参加者が固定化される傾向があり、より多くの保護者の意見を把握する方法を検討していく。</li> <li>・三者面談は、時間が限られているため、問題を多数抱えている生徒や家庭については、別日程で面談日を設けるなど、必要に応じて柔軟な対応をしていく。なお、面談前には学年会議を行い、情報共有に努めており、更なる取り組みを行っていく。</li> </ul>

10-④	<ul style="list-style-type: none"> <li>学校便りや学級便りの発行など、主として保護者を対象とした情報の伝達・公開が適切に行われているか。</li> </ul>
取組目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>保護者と学校の良い信頼関係を構築していくために、定期的に情報の伝達・公開を行う。</li> <li>情報提供により、保護者が学校に関心を持ち、学校理解の一つになるようにする。</li> </ul>
取組内容 と成果	<ul style="list-style-type: none"> <li>学園全体の広報誌「学園だより」、機関誌「緑苑」、生徒指導部からの「生徒指導部だより」、保健室からの「保健だより」、相談室からの「相談室だより」等を通じて、行事予定、生徒の学校での活動の様子、進学、キャリアの情報、生徒指導上で留意すべき事柄等を定期的に様々な形で提供した。</li> <li>平成30（2018）年度は、各学年が「学年だより」を発行し、生徒の日常生活の様子、学年の担当からのメッセージ、翌月の行事予定等を掲載した。各学年がその時々伝えたい情報を提供し、特徴がよく出ていた。情報共有のツールとして活用し、大変有意義なものとなった。</li> <li>前年度の課題を踏まえ、定期的な発行が可能となるよう、全学年で発行日の統一を図ることができた</li> </ul>
今後の課題 と改善策	<ul style="list-style-type: none"> <li>「学年だより」は、今後も保護者との信頼関係を築く基礎となるよう、掲載する内容については、保護者の視点に立って情報を選んでいくとともに、生徒にも興味を持って読むことができるものを提供していく。</li> <li>より多くの教員が「学年だより」作成等の情報発信に関する業務に携われるように学年や分掌内での業務分担の見直しを図る。</li> </ul>

10-⑤	・地域の自然や文化財、伝統行事などの教育資源が活用されているか。
取組目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・総合的な学習の時間や校外学習の時間を利用し、鎌倉の自然や文化財に触れる機会を積極的に増やし活動する。</li> <li>・「赤い羽根」等のボランティア活動を通じて地域社会との連携を深める。</li> </ul>
取組内容 と成果	<ul style="list-style-type: none"> <li>・校外学習で鎌倉の神社、仏閣、産業等について事前学習し、グループ活動を実施した。</li> <li>・赤い羽根街頭募金等に意欲的に協力し、各クラスの委員を中心に積極的に活動した。</li> </ul>
今後の課題 と改善策	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地域社会との連携をよりいっそう強めるために、企業や外部の専門家の導入について、検討していく。</li> <li>・募金の意義や必要性及び地域社会との連携について丁寧に説明し、より自主的な活動につなげていく。</li> </ul>

10-⑥	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教育実習生の受け入れ体制が十分に整っているか。</li> </ul>
取組目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教育実習期間や取組内容を確立させた上で、自覚を促すために事前に十分に学校として指導を行う。</li> <li>・教育実習生が生徒の前で、教員としての自覚をもち、自発的に行動できるよう担当教諭を中心に指導する。</li> </ul>
取組内容 と成果	<ul style="list-style-type: none"> <li>・実習前に事前のガイダンスを行い、教育実習生の自覚と意思を確認して取り組んでもらうことができた。</li> <li>・実習生は、実習開始直後に部長・次長から実習を行う際の心構えの説明を受け、実習に臨んだ。</li> <li>・教科指導と学級指導だけでなく、生徒への接し方や実習日誌の記入についても、それぞれの担当教員が、適切に指導しているため、実習期間で学生に大きな成長が見られた。</li> </ul>
今後の課題 と改善策	<ul style="list-style-type: none"> <li>・事前のガイダンスで、実習の重要性と、それを乗り越えるだけの努力が必要であることを、十分に学生に説明していく。</li> <li>・実習生の受け入れ人数について、担当教員1名につき実習生1名の体制がきめ細かい指導をするため、現在の受け入れ人数が理想であると考えている。</li> </ul>

## 11. 入試・広報活動（情報提供）

11-①	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学校の教育活動についての説明会を実施したり、学校案内を配付したり、ホームページを活用するなど、学校に関する様々な情報が、多様な媒体を用いて分かり易く、かつ適切な分量で提供されているか。</li> <li>・ホームページに校長名、学校の所在地、連絡先、学級数、生徒数、教育課程などの基本的な情報が提供され、情報が定期的に更新されているか。</li> <li>・生徒等の個人情報の保護と積極的な情報提供とのバランスに配慮しているか。</li> </ul>
取組目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・校内説明会では、十全な準備と円滑な運営を心がけ、魅力ある説明会を実施する。</li> <li>・生徒募集活動では、定員の充足を目指し、訪問活動を積極的に実施する。</li> <li>・ホームページ等のインターネット媒体を通して、学校についてのタイムリーな話題を迅速且つより広範囲に発信する。</li> <li>・ダイレクトメールや学校案内等送付など紙媒体の広告活動を増やし、情報の受信環境に影響されることなく学校情報を伝える。</li> <li>・教育関連雑誌等に学校情報を広告掲載することで、私学の高校受験に関心を持つ受験生や保護者に広く本校について知ってもらう機会を作る。</li> <li>・来校した受験生に明確でわかりやすい情報を提供するとともに、本校の受験につながるような、受験生の強い関心を引く説明や相談を行う。</li> <li>・来校者の個人情報を適切に管理し、十分に配慮して保護をする。</li> </ul>
取組内容 と成果	<ul style="list-style-type: none"> <li>・校内説明会については、在校生や卒業生、また在校生の保護者など、教員以外で鎌倉女子大学高等部をよく知る様々な人に登壇してもらい、本校の魅力を伝えてもらうことができた。募集活動後半の説明会では、来校者数は平年並みであったが、特に9月の説明会において、来場者数が昨年を大きく下回ったことは、受験者数の減少につながる一因と考えられる。</li> <li>・学校訪問においては、専願者の増加を図るため広報担当を中心に1学期から積極的に中学校を訪問した。9月には、全職員による中学校訪問を行い、本校の新しい入試制度の告知を行った。</li> <li>・ホームページについては、説明会の情報や日々の学校活動を適宜掲載することができた。また、平成30（2018）年度から始まった本校の教育内容や新しい取り組みについては、更新が遅れないように配慮した。</li> <li>・説明会やみどり祭等の、受験生が来校するイベントについては、すべてダイレクトメールを発送し、来校を促すことができた。ダイレクトメール発送の時期については、直前になることもあったが、期日には間に合うように発送した。</li> <li>・大手の塾の教室に置かれる受験雑誌の広告には、校友会活動の実績や鎌倉女子大学への進学についての記事を掲載し、受験生の目線に立った広告活動を行うことができた。</li> <li>・説明会等で来校した受験生には、説明会後に校内施設見学や個別相談へ積極的に促すことができた。また、夏季休業期間などにも個別に見学に来校した受験生や保護者が数名いた。</li> <li>・来校者の個人情報に関しては、共有するファイルに入力する形式で管理し、入力内容に不備がないように配慮した。</li> </ul>
今後の課題 と改善策	<ul style="list-style-type: none"> <li>・校内説明会については、10月以前の入試イベントの内容の充実を図る。クラブ活動体験や授業体験は、受験生が本校の教育活動を体験し理解できる機会となるため、さらに内容の充実を努め、多くの専願層の受験生獲得を目指す。</li> <li>・次年度は、選抜方法について早急に格子を固め、1学期中には県内の中学校の訪問を通して告知活動を行う</li> <li>・ホームページについては、新年度のパフレットに合わせて平成31（2019）年度に</li> </ul>

	<p>大きく内容を変更する予定である。令和3（2021）年の新校舎移転に関しても新たなページを作成して掲載できるように準備を進めている。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>• ダイレクトメールの完成を説明会実施の1か月前に設定し、内容の検討から発送まで十分時間に余裕をもって行うようにスケジュールを組み立てる。</li><li>• 雑誌の掲載については、受験雑誌に限らず、新聞広告や大衆雑誌の記事など、より多くの人の目に触れる媒体への掲載を視野に入れて内容を検討していく。</li><li>• 来校した受験生や保護者が再び来校したくなるように、一人ひとりへの声かけと丁寧な個別相談を心がける。また、随時個別見学が行っていることを様々な場面で告知していく。</li><li>• 来校者の個人情報、入力後に必ず入試広報主任が確認する。また資料の発送前などには、複数の担当で受験生の住所等のデータを点検した上で、発送作業に取りかかる。</li><li>• 長期休業期間中に随時個別見学に応じる旨をホームページ等で積極的に紹介する。</li></ul>
--	---

11-②	<ul style="list-style-type: none"> <li>・高等部の募集力向上に向けた改革における事務支援が適切に行われているか。</li> </ul>
取組目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・高等部入試・広報担当教員の業務補佐と支援の充実を図る。</li> <li>・募集人員充足に向け、①学校案内制作・ホームページの運用、②模擬試験会場貸出における広報、④学習塾訪問頻度向上等の支援活動等を行う。</li> </ul>
取組内容 と成果	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学校案内、ポスター制作の支援を行った。入試広報担当教員と制作者とをつなぐ役割として、学園として求められているものや高等部が目指す教育方針や教育方法について制作者と共有し、よりよい提案を引き出せるよう配慮した。</li> <li>・接続教育推進プロジェクト会議を開催した。事前に議題を通知し、資料作成依頼段階で各部教員と共通認識を持つことで、会議当日は有意義な議論が行えるよう配慮した。幼稚部から高等部までの現状と課題を共有し、各部の戦略的な募集力向上を図った。</li> <li>・大手塾の模擬試験会場として施設貸出の窓口となった。岩瀬・大船キャンパスで計3回実施し、うち1回は約500名弱の模擬試験受験生を受け入れた。女子中学生に対する広報を行うことができた。</li> <li>・初等・中等接続教育担当部長による塾訪問の予定を共有し、資料等の準備をサポートした。効率的・効果的な訪問が可能となるよう、学内の事務手続きを補佐し、担当部長の事務負担を軽減した。</li> <li>・上述の通り、募集定員充足に向けた取り組みまたは支援を行ったが、入学者は定員に満たなかった。</li> </ul>
今後の課題 と改善策	<ul style="list-style-type: none"> <li>・計画的な募集活動の補佐に加え、教育活動を効果的に伝える学校説明会の運営の支援等を行い、志願者数の増加を図る。</li> <li>・学習塾に対する告知の増強を図る。塾講師へ高等部の優位性を強く発信する。同様に、中学校訪問時における高等部認知度の向上を図る。</li> <li>・ホームページの情報更新について、時機を逃さず計画的に行う。</li> <li>・初等・中等接続教育担当部長がより募集活動に専念できるよう、引き続き事務手続き等のサポートを行う。</li> </ul>

## 12. 教育環境整備

12-①	<ul style="list-style-type: none"> <li>多様な学習内容・学習形態などに対応した施設・設備の整備が行われ、活用等が適切に図られているか。</li> </ul>
取組目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>音楽室、美術・工芸室、書道室、情報処理演習室、調理実習室、家庭科室（被服）、物理・地学室、化学室、生物室など各特別教室を有効活用する。</li> <li>各教室や特別教室に設置された電子黒板を有効活用する。</li> <li>電子黒板活用のノウハウの学校全体での共有を進める。</li> </ul>
取組内容 と成果	<ul style="list-style-type: none"> <li>音楽室、美術・工芸室、書道室については、各教科の授業で活用した。特に、2つある音楽室は、合唱の練習などの際に、パート別に分かれ2カ所とも有効に活用した。</li> <li>情報処理演習室については、授業のほか、総合的な学習の時間などにも活用した。</li> <li>家庭科では、調理実習室、家庭科室（被服）とも実習等で、頻繁に活用した。</li> <li>理科室も環境整備が整ったことから、実験で多用するようになった。化学室のドラフトチャンバーも実験の際に活用した。</li> <li>各教員がタブレット端末を持つようになったことから、パワーポイントなどで授業を進める科目がより増え、前年度以上に教室の電子黒板を多用していた。また、動画や画像、ホームページなどの視聴覚教材を使用する際に多く活用し、パワーポイントを用いた生徒の発表の際にも有効に使用した。</li> <li>電子黒板やタブレット端末などの活用のノウハウについては、徐々に浸透しつつある。</li> </ul>
今後の課題 と改善策	<ul style="list-style-type: none"> <li>各教科や総合的な学習の時間などで、充実した施設を有効に活用している。今後は、教科を横断した活用などを模索し、より有効な活用を行っていく。</li> <li>電子黒板やタブレット端末で使用したコンテンツを、個人や教科内だけでなく、学校全体で共有する方策を考え、活用をより充実したものにしていく。</li> <li>総合学習などの学年を越えた学習活動の際の、大教室や演習室での電子黒板などの視聴覚教材の利用法について、引き続き検討していく。</li> </ul>



12-②	・施設・設備の安全・維持管理のための点検及び整備が行われているか。
取組目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・施設・設備の安全を確保する</li> <li>・施設・設備の機能を維持する。</li> <li>・より快適な環境で生徒が学校生活を送れるよう環境整備を行う。</li> </ul>
取組内容 と成果	<ul style="list-style-type: none"> <li>・年次、月次、日常の点検により施設・設備の状況を把握し、不具合に対処した。</li> <li>・職員の日常作業の他、清掃・樹木管理、プールの保守点検等業者への委託による環境整備・安全確保等も行っている。</li> <li>・空調設備等設備機器の経年劣化による不具合への対応を行った。</li> <li>・ブロック塀を撤去し、フェンスを設置する安全対策工事を行った。</li> <li>・岩瀬キャンパスに保管しているPCB安定器分別作業、濃度分析を行い、平成31（2019）年度初旬には処分完了予定である。</li> <li>・プール棟浴槽内のタイル下地に浮きがみられたため、安全対策工事を行った。</li> <li>・敷地北側法面の安全対策として、大規模な樹木剪定を行った。</li> <li>・創立80周年記念事業に備えて、敷地測量調査、ボーリング調査、電波障害調査、地歴調査を行った。</li> </ul>
今後の課題 と改善策	<ul style="list-style-type: none"> <li>・年次、月次、日常の点検による施設設備の安全管理を継続する。</li> <li>・委託業務の内容等が実状に合わせたものになるよう見直しを図る。</li> <li>・創立80周年記念事業として岩瀬キャンパス再整備を計画している。その内容を踏まえて設備整備計画を見直し、実行する。</li> </ul>

12-③	・教材・教具・図書の整備や学校教育の情報化が適切になされているか。
取組目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・様々な教育活動の目的に合う場所や教材・教具・図書などの教育環境を整備する。</li> <li>・パソコンや情報機器のマルチメディア性を生かし、教育活動の情報化を推進する。</li> <li>・情報機器活用のノウハウの学校全体での共有を進める。</li> </ul>
取組内容 と成果	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学習室、マルチメディアラウンジの電子黒板や、情報処理演習室、マルチメディアラウンジのパソコンも有効に活用されている。</li> <li>・パソコンの台数が足りない時は、タブレット端末で補って活用している。</li> <li>・マルチメディアラウンジにプリンターが設置され、総合学習や発表の準備などで、生徒に活用されている。</li> <li>・図書室では、継続的に蔵書数や映像教材の更なる充実を図った。</li> <li>・各教室に設置された電子黒板は、ほぼ全教科において活用されるようになった。</li> <li>・自習室については、進路指導部と高等部3年学年団が担当し活用している。</li> </ul>
今後の課題 と改善策	<ul style="list-style-type: none"> <li>・今後の総合学習（Kamakura Beyond Project）などの活動を考慮し、現在使用している情報処理演習室、マルチメディアラウンジ、学習支援センターEの他にも、パソコンの台数・場所ともに計画的に増やすことを検討していく。</li> <li>・情報処理演習室と学習支援センターEは、通常は施錠されているため、生徒が自由に使用できるマルチメディアラウンジのパソコンについては、常にすべてのパソコンが稼働できるように、引き続き整備を行っていく。</li> <li>・生徒各自がタブレット端末を持つことを考慮したうえで、パソコンとタブレット端末の両方を効果的に活用する方策を模索・検討していく。</li> <li>・教育活動でのパソコンや情報機器を利用した情報化については進んでいるが、利用方法についてはより効果的な更なる工夫と、それらを共有するための組織的なシステム作りを進めていく。</li> <li>・図書館に関しては、新校舎計画と並行して、図書委員会による図書管理などの方策を検討していく。</li> </ul>

## 13. 事務支援体制

13-①	・高等部の教育活動における支援が適切に行われているか。
取組目標	・日常業務における事務支援体制全体の強化を図る。
取組内容 と成果	<ul style="list-style-type: none"> <li>・窓口での来校者や電話での各種問合せについては、「窓口は学園の顔」という言葉を常に意識し、適切かつ丁寧な対応に努めた。</li> <li>・業者支払いの勘定伝票や預り金についての新たな帳票を、引き続き初等・中等教育支援室で作成し、事務処理の合理化・厳格化をいっそう進めることができた。校友会費処理についても、経理部の指導のもと、改善を進めた。</li> <li>・昼食時におけるカフェテリアでの食事の提供について、総務部や関係各部と相談し、取扱業者の見直しを行った。更にこれまでの対面販売方法から自動販売機での販売方法に変更した。これによって、食事提供での補てん金が不要となり、昼休み以外の時間帯でも食品を提供することができるようになった。</li> </ul>
今後の課題 と改善策	<ul style="list-style-type: none"> <li>・外部との対応に関して、今後も引き続き適切且つ丁寧な対応を心がける。</li> <li>・預り金の厳格化については、経理部や総務部、各部と連携し、引き続き対応を図っていく。</li> </ul>

## 14. 自己点検・評価

14-①	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自己評価が年に1回以上定期的実施されているか。</li> <li>・全教職員が評価に関与しているか。</li> </ul>
取組目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・年度末に当該年度に実施した教育内容を振り返ることとし、次年度に生かせるように自己点検・評価を実施する。</li> <li>・自己点検・評価報告書の作成は、分掌主任を中心に中・高等部の全教職員で行う。</li> </ul>
取組内容 と成果	<ul style="list-style-type: none"> <li>・分掌主任や教科主任を中心に点検項目にしたがい、すべての教育内容について成果や達成状況などを点検し、次年度に向けての改善点を洗い出した。</li> <li>・報告書の作成においては、部長・次長と分掌主任を中心に教科主任や学年主任から指示する形で、全教職員が振り返りを行い、次年度の工夫や改善に生かすことができるようにした。</li> <li>・各データについては、その都度整理することで、年度統計に反映しやすくすると同時に、年度の途中状況もわかりやすくなった。</li> </ul>
今後の課題 と改善策	<ul style="list-style-type: none"> <li>・担当者ごとに作成された自己点検・評価の内容確認に比較的時間を要するため、元となる事実やデータをより正確に記録するよう努める。</li> </ul>

14-②	・自己評価の結果が具体的な学校運営の改善に活用されているか。
取組目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自己点検・評価の結果を受けて、改善すべき点について、次年度に生かす。</li> <li>・取組内容に関して成果が表れているものについては、さらに工夫を凝らしながら次年度以降も継続して実施する。</li> </ul>
取組内容 と成果	<ul style="list-style-type: none"> <li>・前例踏襲を是とせず、現状に即した取り組みを推進したが、教員各自の考え方に幾分温度差が見られた。</li> <li>・成果に結び付いていない、または目に見える結果が表れていない教育内容については、十分な検討を重ねた上で、その理由の検証を行った。</li> <li>・教育内容を細部にわたり点検し、次年度の教育活動に生かすことができた部分もあり、徐々に改善されてきた。</li> </ul>
今後の課題 と改善策	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教育内容によっては、すぐに目に見える結果が出ないものもあるが、学校教育目標に基づき、教育内容を抜本的に見直し、の吟味を重ねスピード感をもって改革にあたる。</li> </ul>